

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和五十年三月二十五日 印刷  
昭和五十年四月一日発行 (毎月一日発行)  
創刊大正十三年 通卷五七五号

# 川柳塔



No. 575

特集「一頁の句集」

四月号



酒 清  
**日本盛**  
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀

超特撰  
(化粧ケース入)  
一、ハリットル詰・一、八〇〇円



えらばれ  
みがきぬかれた  
灘の酒  
超特撰 日本盛



あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼  
焼 餃子  
叉 焼 饅頭

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL (641) 0551-2



〈出張店〉 なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋  
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

## 故 人 の 眼

北風をこころよしとす受験の子  
控室 ライバル同士飾りたて  
赤い爪合掌のまま見栄もなし  
ここ迄がやっと神様仏様  
受験の子の母として聖女たり

ことしの南座初春公演に特別出演しての途中急逝した三津五郎が、大法輪2月号に随筆を書いてゐる。恐らく彼の絶筆になったろうと考えられるが、妙に心打たるものがある。――「僕は故人の眼を恐れたという親爺の言葉を生涯守り続けるつもりだが、道元様はやっぱ坊主共はお釈迦様の眼を恐れると言つて居る。それと同じようなことだが昔の役者は舞台に出る前に必ず手を合せて拝んだものだ。芸人が舞台に出る前に合掌するのは当

然だった。関西ではまだ古い芸人さんで舞台の袖で合掌する人がいる。……」三津五郎の言いたかった事は、初心忘るべからずという意味を含めて、親や師匠や先輩を畏敬せよとの事であろう。芸人だけでなく大切な問題であることは言を俟たぬところ。

それにしても、私の頭から路郎、水府、紋太、雀郎、三太郎といった諸先生諸先輩の顔が疎かになりがちなのは、心すべき事どもではないだろうか。

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 四 月 号

# 川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青



座右の句  
寝転べば畳一帖ふさぐのみ  
私の句

(路郎)

辛うじて住む東京をうらやまれ

山根白星

故人の眼

人に歴史あり

俳風柳多留廿五篇研究

(五)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷胡・西原亮  
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

中島生々庵 (1)

菊沢小松園 (2)

川柳塔 (同人作品)

水煙抄

麻生路郎物語

(4)

秀句鑑賞

(同人吟)

(水煙抄)

愛染帖

近作

百人一首と川柳 (10)

菊沢小松園選 (28)

東野大八 (24)

川村好郎 (21)

香川醉々 (27)

橘高薫風選 (36)

諸家 (35)

富士野鞍馬 (34)

## 人に歴史あり

菊沢小松園

一国の歴史は英雄の伝記であると昔から言われている。

戦国乱世の群雄割拠の時代、北条氏より上杉、武田、伊達、毛利の戦塵より織田信長、豊臣秀吉と受け継がれて徳川氏に至る。その間一人の太閤殿下の為に多数の人々の血が流され、数々の罪の無い人達の屍は戦場に曝されたのである。一人の征夷大將軍の栄位の蔭に大衆の運命は根こそぎ狂わされたのである。歴史の表面に現わされた華やかさの裏に無辜の民衆の血の呪いが騒り泣いているのである。なるほどそれ等の人達は偉かった、勤勉であり、努力家であった。知恵と運命に恵まれて栄光の座に就けたのであった。

それ等の伝記を繙けば判るように、青少年時代己にそれらしい鋭鋒を現わしていた。中江藤樹の少年時代、渡辺華山の青年時代すでに凡人とは違ったものを持っていたと知ることが出来る。それでは世俗の庶民に歴史は無いのかと言えれば決してそうでは無い、自分の過去、自分の経歴それ等は個々の人達に取って如何なる英雄豪傑よりも大切な自分の歴史である。人に歴史あり、庶民の声また聞くべ

一頁の句集

(同人特集)

若本多久志・本田恵二朗・西尾 榮・西出一榮

戸田古方・橋高薫風・永宗宗義・北川春巢

第2回各地柳壇賞決定

若本多久志

一分間の柳論

神谷凡九郎

第22回大萬川柳大会

雅号ぶっちゃけばなし

室谷徹舟

初歩教室

本田恵二朗

大萬川柳「壁」

川村好郎選

柳界展望

本社三句句会

(庸佑・整理)

各地柳壇(佳句地10選)

八木摩太郎

一路集「PTA」

小出智子選

「甘茶」

久家代仕男選

「歩道」

長野文庫選

編集後記

(一三天・葉子)

座右の句

何がしの使命果した屑の嵩

私の句

万物に感謝安らかな余生

(千太郎)

落合 思月

(38)

しである。併し乍らそれ等の人達は他日、成功して偉人となり、学者となり世間の人達から認められて初めて青少年時代のことまで人の目に善行として、美談として、一部の詮索好きな人達に依って紹介されたのである。では普通一般人の青年少年時代にこれらの事が無かったかと言えは決してそうでは無い、美談善行として語り伝えて恥しからぬことは沢山ある筈である。只それその人達が平凡の裡に生涯を終えて世の中へ伝承されなかっただけではなかるうかと思う。例えば名高い例のワシントンの桜である、父が大そう大切にしていた居た桜の木を切って終って、父が大変驚いて誰が切ったかと咎めたので少年ワシントンはすぐ私が切ったと言ったので父はその正直さを褒めたという挿話である。

斯んな話は他に多く例があろうと思う。偶々大統領になられたので過去のことだ輝いただけである。環境と運のよい人達に恵まれただけの話であって大統領にならなければ太平洋を越えてまで来る話ではない。私にも少年時代似たような話がある。当時、大正二三年頃、軒に釣す葱がよく流行していた頃、竹馬に乗って近所の口喧しい家の釣葱を引つ掛けて散々、皆んなが逼けたが私一人踏止まって正直に断ったが弁償さされて父から叱られた。決して褒められなかった。運が、環境が違うと一方は褒められ一方は叱られる。行為は同じであったのだ。

叱られたとりにやって褒められる



西尾 榮選

和歌山市 野村太茂津

牽く腕を背押す力に変えてみる  
極限に緊める手もありネジの性  
批判する育ちの怖さうれしくて  
タンゴからジルバに変わる足も貧め  
弛めては見ても絃です弓の性

松原市 谷垣史好

天地悠久月と駱駝と旅人と  
うどんともいえぬ値段になりけり  
親と子が麒麟見ている肩車  
真直ぐに煙が上る日の愁い  
云い過ぎた夜は大きなうがいする

枚方市 宮川珠笑

新築を訪うて寝室見せられる  
造成に追われ斜めに咲いた梅  
渋滞の車どどん抜く歩道  
児が呼べば母はいつでも覚めている  
玄関を閉めたら部屋の灯を消され

大阪市 吉田圭井堂

古道具屋の値に驚いてしまひ込む  
発案者が先ず首になる省力化  
まな板で跳ねては鯉の名がすたる  
震度五も越え金婚へたどりつき  
逆縁の子が先輩でいるお墓

桜井市 岩本雀踊子

ライトの光の巾をたたく雨  
愛情を計る女が無理を云う  
種火だけ残す夫婦の共稼ぎ  
死んで帰えれと母が戦時に云った嘘  
端くれと云う親戚にからむ義理

青森市 工藤甲吉

あの世からにらんでる目はよく光り  
孫の頬べたは我が家の宝物  
酒代にとってかわるは葉代  
女房に死なれた二人酌ぎ酌がれ  
淡雪は人のいのちをそのままに

兵庫縣 小西無鬼

俺は歌う僕の記録の軍歌<sup>ツタ</sup>だから  
もの言わぬ子等へ言わない日が続く  
禁酒禁煙意志は確かに潜在す  
時の経つ速やさへ足踏してみたし  
はつきりとけじめをつける墨を摺る

富田林市 岩田美代

つき出したひとりよがりの顎であり  
痛いところ二月の月に刺されそう  
私にそんな言葉が派手すぎて  
昨日今日頼りにならぬ日を責める  
ときめきを忘れた女の太い眉

水見市 関美子

労作唄いつしか観光歌になり  
蛸壺の哀れは手負い蛸二匹  
接点を夕餉に置いて核家族  
ふとハダに温もり郷土玩具展  
片減りのペンに吾が性教えられ

倉敷市 水粉千翁

あきらめてなるかなるかひととり言  
男対女で距離をもてあまし  
子の夢を描いて夫婦は黙り込み  
わたくしを支えて虹よ消えるのか  
還暦に描く青年の虹である

兵庫縣 遠山可住

バックミラーにじゃれてる雀を笑えない  
山肌があか切れとなる不況風  
十二時をまわり子を持つ顔となり  
せんべいぶとんでないと眠られず  
黙って聞いて黙って反対

八尾市 香川醉々

ネクタイが一本父と子の絆  
節分の豆分けおうてめおと鬼  
夕焼けて明日を信じるかたつむり  
ゲラゲラと鬼が笑っている虫歯  
ルナールの日記を蟻が這うている

香川縣 三井醉夢

黄八丈恋の手習い初めし頃  
鉤裂は愛別離苦の日を覚え  
愛執を語る着物が底にある  
古い畳紙に愛染明王おわします  
三十周年クラス会

大阪府 山川阿茶

声だけは乙女のような早春賦  
きたなさも矛盾も自分と同居する  
寒詣り血圧計ってから出かけ  
霞だけで生きてゆけそな年となり  
司会者の入れ歯の口許気にかかり  
整形をしてはりますのに絶句する

岸和田市 高橋操子

心電図の事は家族にもらずまじ  
ふり返る人生悔のひとつところ

冬の蚊をたたけば無情ことさらに  
老人会にはいるに勇気要ると知る  
古いと笑って人間から遠ざかり

大阪市 本多柳志

古稀のまだ野心をかくすベレー帽  
壁一重かわりのない人が住み  
焦点に立ちたいだけの義侠心

熊野吟行

酌ぎ合うて明日は別れる宿浴衣  
白壁のしみの重みも城下町

大阪市 阪上十止庵

雪をただ寒しと思う老いたりき  
淡雪をせめて借家の眺めとす  
肩書きの重さうとましひとを恋う

恋にまで裸になれぬ小金持つ  
恋猫が帰らぬ風雨注意報

岸和田市 植山武助

紺がすり似合うアンコで島を出ず  
その中の一人が恋を得て疎遠  
二枚目のような気になる仮縫日  
親戚に泊って旅情湧いて来ず  
なぐさめの大阪芥に味があり

大阪市 金井文秋

春の陽が大地へ気合入れに来る

馬子にも衣裳進物に包装紙

集金を待たしたままで長電話

一方が折れて平和を取り戻し

女婚厄年

人生も峠にばかり厄払い

大阪市 小出智子

雪国の珈琲の香は恋に似る

本を読む父の暮しへ本を買う

活けられた花でいのちを知っている

ことなきを得て節分の鯛焼く

次男中学進学

学生服を着けて大人の貌をする

大阪市 河野君子

夫婦して豆まく鬼も福もいず

梅一りん一りん心の窓を開け

家紋守る夫婦に確かな世の流れ

文机に女心をにじませる

春孤独花の心を盗まんか

島根県 堀江正朗

雨だれは春の小川の曲をして

早起きをして一日を待ち呆け

慾捨ててぼんやりすれば子に還る

炬燵から若さうらやむ首を出し

直線に歩いた誇り捨てず老い

島根県 堀江芳子

なんとなく萌えるものあり春動く

立ち語春のんのんは女から

お見舞に冗談貰うほどになり

病棟の廊下もぐさが匂うて来

病む身より辛い留守居の夫想う

岡山県 岡村久志良

美しい話聴きたい耳を掘る

人のため祈る両掌が合いました

疑うことやめたら探し物が出た

良寛になりたい夢が一つふえ

高槻市 若柳潮花

盛りあがる拍手を幕の裾に聞く

鶯が啼きに来ずとも梅は梅

ちり鍋へ女の箸はふぐを除け

宝塚歌劇文化祭より

フィナーレ汗と涙に光る顔

尼崎市 黒川紫香

遠廻りさせ道路工事また休む

一円玉流し眼がまた通り抜け

孫娘宝塚初舞台

脚上げて上げて舞台の袖に消え

高知から室戸を廻る

亀の来ぬ日和佐は冬の時雨する

宝塚市 傍島静馬

律儀者出世コースを迂回する

わが道をまげて時流にさからわず

流し眼に謹厳居士の血がさわぐ

金ためるほかにハイミス夢がない

豊中市 戸田古方

尽きないもの派手でないから尽きないの

生きようとしないからこそ生きつづけ

うぬぼれと気づけば少し淋しすぎ

百点零点テスト嫌やです嫌いです

岡山県 浜野奇童

友情が両手の握手からこぼれ

本人の覚悟へ友情妥協せず

先生を総攻撃の雪礫

仲人の嘘を笑うて夫婦です

西宮市 若林草右

神さまとしばし同居の当りくじ

畳の目ひとつ一つに春の甞

邪魔にならぬよう定年気をつかい

狭心症 台風一過といういびき

名古屋 吉田水車

北方領土空しく小手をかざすのみ

世の中はほどほどにして梅の花

すなおならずなおでもしやと子をおもひ

山村流扇に心ある如し

大阪市 西出一栄

抜けずとも恍惚防ぐくすりなら  
孫の句を添削せずにはめておく  
華麗なる馳走へ祝辞の長いこと  
太公望今日の獲物は路のトウ

藤井寺市 西 いわを

春の使者鴈が浮いている水面  
裸木の枯れて安らぎ覚えさせ  
くしゃみして「くさめ、くさめ」とおまじない  
初対面猫に怪訝な顔をされ

堺市 山本素郎

遣された子に夕鶴の影白し  
雲きれて富士は目測より低し  
なに思ひだしけん妻に抓られる  
引率の先生腹の虫が鳴り

神戸市 小浜牧人

新婚の二人で青い鳥を飼ひ  
追い越してから風当り強くなり  
伝統を継ぐ紋付きを重く着る  
花の咲く話ばかりをして騙し

八尾市 高杉鬼遊

刻まれた石のひとこと地の底に  
碑へ人の好める文字を彫り  
打ち首にされて椿のなお赤し  
ナガサキの雨あたたかし傘の人

愛媛県 渡辺曉童

ふぐだ酒だと 冬にとけこむ  
きさらぎという うまい日本語  
争わぬのは 年と知る年  
老いぼれたのは 鏡かけ也

倉敷市 野田素身郎

日曜出勤くわえ楊枝で家を出る  
真ん中が無口で三人掛け静か  
寒かったやっぱり彼女来なかった  
レイオフを末っ子は嬉しがり

大阪市 中川滋雀

母の忌(一句)

三部経足のしびれもありがたし  
冬の陽のぬくみまぶしいビルの肌  
さよならで消えたチャンスといま判り  
メリハリもあり暴言に酔いはじめ

神戸市 仲 どんたく

モデル代無いので自画像ばかり描き  
時 逆に巻いて有田の窯の色  
スケジュールに風邪も入ってる松の内  
越冬の金魚の鰭が春に触れ

平田市 久家代仕男

製材所錆びぬ程度に操業し  
賞めること知らぬ男を賞めてやり  
過疎のいま露店さえ出ぬ節分祭  
石油の帯へかもめが泣いている

倉吉市 奥谷弘朗

他人の子育てた誇りだけ残り

妻だけが父ちゃんと呼ぶ淋しさよ

たとえばの話が胸にジンと来た

一言が過ぎて気まづくなる夜長

岡山県 池田古心

門構え門は閉ざして梅は咲き

見当らぬ筈だよ銜はわえていたパイプ

もったいない言葉を知らぬ子に育て

すべらした口に悔知る夜の孤独

松江市 中川晃男

都会から帰った子らと初詣

おめでた尽くしのテレビで寝正月

城下町を浮世絵にする牡丹雪

遠い道走ってきた少年の鼓動

東京都 山根白星

隣からよこす誤配の納税書

そこいらのどこ男親理解せず

恐ろしく皮手袋をやおら嵌め

財布ごとよこす気っ腑の姉芸者

東大阪市 久米奈良子

愛の実の南天赤き二月なり

旧正の掌に受けとめるばたん雪

一年が僅かに遠い人となり

もの云わぬ古墨時代の色の冴え

史好氏入院一旬

大阪市 江城修史

冬の陽の恵みはうすく友は病み

別れ来て言いそびれたる言葉吐く

人の和のむつかしさ知る夜の底

友の忌へ想い出重き指を折り

守口市 村田瓢太

色褪せた写真に房々髪があり

足るを知り日々好日に掌を合わせ

福祉福祉と結局誰が負担する

無責任な奴ばかり育てて民主々義

米子市 林瑞枝

残された娘の目に父が淋しそう

老母の居る里の土蔵に灯をかざし

さりげない仕草で愛を包む銭

振り返る過去の虚栄の空しとも

東大阪市 竹中肖二

下手な慾出して居づらくする職場

美女と云うポーズでライト受け止める

幸運の筋が私の掌にはない

つじつまの合わせ話へボスの無理

新宮市 大矢十郎

如月の汗へも勤勞所得税

子へ婿へ言い度い事もない平和

ネクタイを広げて後を追う五十

触れそんな路巾ダンブに与えられ

泉大津市 村上春巳

時価と言う寿司喰って来た月給日  
ダンブカー鍵屋の辻を揺るがせて  
俳聖の里ゆっくりゆっくり歩く  
起された電話は父が死にました

倉吉市 小林由多香

停電へふと警戒警報想い出し  
停電へ隣もなにやら慌ててる  
銀婚の旅行プラン春めきぬ  
転居先不明の賀状にお年玉

八尾市 宮西弥生

祈ること忘れたある日に出た裏目  
病んでいる指にボタンすねてくる

父片肢切断(一句)

一本の足に余生縫りつき  
群衆の中の自分を塗り替える

八尾市 大路美幸

春だからもう泣くまいぞ電線よ  
時価のない太陽不況へ惜しみなし  
信号は赤 道ばたの供え花  
人生の起伏 名曲より優る

東広島市 高橋鬼焼

踏まれても影は素直についてくる  
逢える日の仮面が重い過去を持つ

どんぐりのころげる道だ詩がある  
ゆっくりと冬陽にとける雪の私語

八尾市 高橋夕花

出会いはかくも悲しき春の雪  
還えない肌の嘆げきに紅深かく  
この人の虜になりたい寒椿  
春の雪花のうわさに堪えて舞う

大阪市 神谷凡九郎

無理だろうから止めたなくなるの  
あきまへんといつでも、が、いたくない  
悟りとも云うがあきらめとも云う  
眼のやり場やっぱり他人も困ってる

堺市 藤井一二三

中得マチ子さん結婚(二句)

初々しい笑み しあわせの中に居る  
石ころの肌に見つけた陽の温くみ  
厄年にもう保険屋が来て陥とし  
本心を写すあなたへ鏡撰る

守口市 羽原静歩

タイル冷々と一番風呂の湯気  
残飯の落ち目を見たり冷蔵庫  
春斗の相場押し寿司に似て  
恵方にもやっぱり交通事故があり

生駒市 草深醉升

狭い土地方位方角言うといれず

よそごとのように福祉が議論され  
音たててツララの落ちる陽のぬくみ  
ちと足らぬ顔して抜け目なく廻り

三重県 川上大輪

手を振ってしまえば過去の人となる  
宿の下駄男は町に用があり  
煙ふと雲になりたい野心持つ  
虹消えて幸せ一つ盗まれる

堺市 高橋千万子

ほしいもの出来て小さなうそ一つ  
美しく見せる角度を知る女  
柳の芽のこの公害ってどんなもの  
桃山の豪華を雛の段に見せ

松江市 恒松町紅

倅せなローカル線に住む夫婦  
中古車のように職業紹介所  
倅せを包む合カギ見当らず  
太陽のエゴ北向きのビルデング

奈良市 宮口笛生

お天気が変るといわれる事をする  
柳の芽猿沢池に春が浮く  
日記帳書くことのない日が続く  
また来るといふ慰めで見舞い去に

島根県 小砂白汀

男だろー、丸いばかりじゃたよりない  
欠点ないのが欠点とは異なることを  
押し寄せる重油をヒシヤクで春の海

京都市 都倉求芽

新しい朝を分け合う軒並ぶ  
売店ですぐき千枚漬まだ迷い  
居眠りのこんな手近かな極楽浄土  
機嫌よい靴を入口知っている

竹原市 三宅不朽

婦長とや恋のひそかなままおわり  
この坂へ病友にかす掌の恋ならず  
傷だらけでもよし合す掌しかとあり  
おやすみといえる倅抱いて寝る

大阪市 川口弘生

信心の名で湯の峯の湯に浸り  
酒飲んで居るから喧嘩せずにおき  
見破った仮病に温い聴診器  
聴診器私情まじえた日の誤診

大阪市 藤田頂留子

こわせない人には悪夢と見えてても  
箴竹に決断つけてもらおう恋  
自動ドア後を閉めぬ娘に育て  
人生の中入と病んでる四十代

岡山県 出原敬一

住み替る隣へ艶な京言葉

大焚火海女の夫の思い遣り

蛸壺に花活け主婦にもどる海女

鳥取市 両川 洋々

八十八カ所巡ってもどってから寝込み

同情の結局高いものにつき

先の先読んでいるからこそ黙まり

スジ論と別に妥協の隙も見せ

和歌山市 垂井 千寿子

湯の峯温泉吟行三句

上天氣雨男の亡夫うわさされ

汐の香が駅弁当に味を添え

山の宿亡夫の逸話も聞かされる

亡夫宛の葉書宿から誘いに來

柏原市 大峠 可動

一線を引く万年筆を下さい

陽の当る場所へ夫婦の声が寄り

毒舌の白いペンキが冷たくて

この地なら路傍の石も救われる

島根県 錦 織文子

文化財にされて藁ぶき耐えてます

過去流すなど人間のたわ言か

おじぎして握手して男にしてみらい

オールスト地球だけは動く

神戸市 佐々木 静泉

人生を娘に説く唇が寒い

暖い鍋しばし小言をさけている

几帳面過ぎて自分の場所がない

乱舞する枯葉も土へ還る詩

和歌山市 吉野 富江

父母の墓洗えば静んでくる奇ち

平凡なりズムで茶の間に朝が来る

貧乏になって忘れた肩のこり

船頭が多くて焦点合わされず

和歌山市 小川 佐知子

地に消ゆるまでを一会と雪は舞い

見ぬかれた心を盃へつきこぼし

過ぎた日の泪は飲もう陽が昇る

和解せぬままの友なり計報聞く

和歌山市 若宮 武雄

触れられてカラカラ笑っている造花

夜だけを生きてあくどい色好み

蟻の列怠けぬ無口羨まれ

鬼と云われ仮面のままでいる孤独

鳥取市 河村 日満

職退いたあとをみんなが聞いてくれ

女ごころのこころでゆらぐ手を握り

九十才をすぎて自治体だけでもて

高槻市 福田 丁路

華麗なる種も仕掛けもある暮し

神仏拝み倒した甲斐もなし  
日向ボッコで無念無想

竹原市 山内 静水

こばまれてこばんで俺は意気地なし  
二年ごし注射の跡へ打つ注射針  
恩にきせられて聞きとうない話

西宮市 島居 百酒

当分は自重が続く去年の悔  
云い過ぎを酒が云わして酒で詫び  
献策が皆もつともで纏らず

松江市 岡崎 祥月

色恋をぬきに残り火を燃やす  
盤石でも動かぬ大樹の陰にいる  
まだやめぬ休へ勧告双向け

大阪市 天正 千梢

秩序と調和山川草木の美  
供えてもへらぬ馳走を悲しませ (甥の死)  
わが心自然の調和へとけたくて

岡山市 直原 七面山

ヒヨイヒヨイとヒヨイヒヨイヒヨいと  
キッスの後の口から洩れる聖者の名  
心臓は百まで大丈夫ですと主治医

とびの職

正月二日糖蛋白マイナスで

伊丹市 小川 静観堂

亡妻七回忌 (一句)

遠近のジョナサンで法事賑やかに  
男ありけり勲章吊るまで独身

柳井市 弘津 柳慶

帰省子に麻雀でいかれたり  
二号宅へ専用の髯剃器  
電話口兄弟を間違える

笠岡市 木山 遠二

流行歌弾けばお琴も乙なものの  
立琴に添うて汀女の句が懸り  
保険金何ぼ呉れるか知らずかけ

京都市 松川 杜的

ビタライスがどうのこうのと父と子が  
南部梅林を尋ねて (二句)  
ファインダー一杯梅を匂おわせ記念フオート

梅どころ茶房も梅のものを売り

岡山市 横山 一声

出張に兼ねる用事が多すぎる  
酒の威を借りて挨拶やっとすみ  
還暦の五休のゆるみへねじをまき

鳥取県 清水 一保

神のみが知る運命を氣にかけず  
逆コース地球もしたるか逆自転  
暖房へ明治こたつの意地を見せ

倉敷市 藤井 春日

淋しさを忘れる酒で泣いている

紫煙鮮やか退院の日が近い  
金貯めて心貧しく生きている

松江市 柳 楽 鶴 丸

本当の素顔電話から見付け  
出る杭は打たれるからフアイトわき  
こぼれ落ちた一粒の種かも知れず

岡山市 光 好 陽 子

ひとかけらの愛を求めて旅に出る  
用なしが人間ドック思いつき  
力一ぱい肩をたたけば人ちがい

姫路市 梅 谿 庵 不 醉

借り物を着てて駄法螺吐く見合い  
縄のれんくぐれば百年の知己のよう  
粘っただけもうけたなと妥結額

東大阪市 落 合 思 月

紋付の襟を正した叙勲の日  
花道のない定退で孫を抱き  
人様のまねして私も手を叩き

岸和田市 福 浦 勝 晴

余寒なお不況の底で読む聖書  
満員車明治大正小さくなり  
甘言に崩れると見せ突放し

宇部市 平 田 実 男

良く学べ学べへ人間性が失せ  
倅の花の変化へはっとする

慰め言葉が波紋を大きくし

富田林市 和 田 維 久 子

一言の素直が胸のきずを刺し  
一ことが三ことに娘はね返し  
冒險と思いたくなし鈴を振る

松江市 小 林 孤 呂 二

出勤簿きれいに捺して恵まれず  
妻の執念みごと大学を修めさせ  
曲線ゆるやかに四十九を生きんとす

小松市 馬 場 魚 山

表具師へ紙はたちまち呼吸する  
冬の星高圧線に引っかかり  
元日も運命の神休みなく

大阪市 室 谷 徹 舟

犬何処へよけてよいやら白い杖  
マンションの五階で孫が待っている  
壮快な目覚め感謝の靴をはく

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

据膳に座る愉楽も女 旅  
つまずけば愛も小石のよろさにて  
まめな子にうとまれ戦死の子にやしなわれ

出雲市 原 独 仙

枯れ葉地に還えり新芽の糧となる  
福は内 内に角出す鬼がいる  
陰で糸引く役なんてご免だね

笠岡市 松本忠三

ジーパンで跌坐十八才の乙女  
順番の余興を前に口ずさみ  
足袋をはく仕種女は背を向ける

藤井寺市 児島与呂志

胃の底で何かうごめく音を聞く  
崩れてゆく砂山に登りつめた夢  
夢を追う妻と娘を背負いかね

大阪市 河井庸佑

追い出しておいて爾のうく世辞を言う  
我が子しか目に入らない参観日  
理由どうつけようが左遷なり

岡山市 川端柳子

風車<sup>いま</sup>現在のしあわせふと思ふ  
幕下りるまでにあれもし これもしろ  
雪しきり一本道を征ったきり

兵庫県 河原みのる

国会問答  
春日節ちとせわしない速記嬢

老令福祉金

絵に画いた餅四万まで叩き上げ

私財公開

春雨にクリーソンの境ばやけだし

西宮市 藤村メ女

種明し知ってる手品に孫騒ぐ

愛人と歩巾が揃う春の風  
握手した手のぬくもりを大事がり

今治市 越智一水

落日が重油の海に沈みかね  
この雨で春になるなと思う夜  
ブレ・ハブの灯がふるさとを街にする

鳥取県 森田布堂

献血を済ませ造血剤を飲み  
造成の三日見ぬ間に山が消え  
貧しさに馴れて素直な子の育ち

玉野市 小谷仙山

赤鉛筆で心の地図を塗りつぶす  
親よりも一足早い土筆の子  
空鉄砲其れ程雀馬鹿でなし

東大阪市 竹中綾女

（事故死の大丘子家を訪ねて）  
霊前に句誌を供えて責め果す  
涙せず亡夫を語る明治の女

自動販売機ちよっと考えてから釣りを出す

大阪市 宮尾あいき

雨の日が好きと云う娘の泣きボクロ  
駅毎のポスター心へ虹をかけ  
もうここに春が来てます植木鉢

大阪市 柳原静香

その先を言うから若者に嫌われる

セールスに昼寝の夢をゆさぶられ  
古傷に触れて夫婦もめ直し

・竹原市 小島 蘭 幸

スランプのなにやら古書を取り出して  
一足先に我が家の色紙春にする  
結婚しようかな 親父もう定年

大田市 藤田 軒太 楼

黒白をつけたがるから疎まれる  
名木も暫し眠りの雪囲い  
老残の愚痴盆栽の和らげる

仙台市 川 村 映 輝

弱者をまきぞえにして旗を振り  
出稼ぎに遠まわりして畦をゆく  
出不精が敬老パスに誘われる

尼崎市 高 津 徹 也

我來たり何故か海鳴り聞きたさに  
冷えわたる湖面身じろぎ許されず  
春の花に生れて春の命のみ

岡山県 永 宗 宗 義

貯金みなおろして自嘲の顔となる  
落日を戻すすべなく合掌す  
緋着た姿で根雪消え残る

樺原市 岩 井 本 蔭 棒

三十の処女の意地かやきつい紅  
母と娘が出かけたあとの静寂けさよ

ダンブカー土と一緒に春の花

諫早市 原 田 明 春

栄転という辞令の粗末すぎ

臆病ではないが女房が強すぎる  
臆病風に吹かれ二の足三の足

倉敷市 能 登 原 白 水

目を閉じて心の鏡拭き清め

四季の美と対話嬉しい過疎守る  
春闘の癌に日本むしばまれ

岡山県 竹 内 翁 童

人類の歴史をブルは呵借せず  
担保も取られず不安な金である  
着実な歩み他人に目を向けず

東大阪市 斎 藤 三 十 四

ポーズ恐し小学生の顔でなし  
始発駅あんたはんの席よとゆずられる  
囑託にちと抵抗のある職場

今治市 小 笠 原 有 里

愛のむち歩け歩けと肥満の子  
嘘を言う女きらきら目がきれい  
ささやかな投資一千万の夢を買い

呉市 榎 田 英 詩

人の字のつかい棒に妻がいる  
恍惚のまだ追い続けてる青い鳥  
なるほどなるほどと判ってはおらず

竹原市 時 広 一 路

貝殻の過去を捨て切る春の海  
空白を埋める言葉を探すペン  
足の向き変えれば向い風となる

島根県 榊 原 秀 子

子の進路賭ける三月落付かず  
人並にその人並へ背伸びする  
バラバラの夢でつなげぬもどかしさ

松原市 玉 置 重 人

美容食考えている平和です  
誤解ある日哀しい炎燃やしてる  
褒められた分だけ減ったナポレオン

羽曳野市 塩 満 敏

胃が良くなれば肝臓待っており  
中年を五臓六腑がふりまわし  
孝行のひとつ公立パスします

今治市 原 田 一 風

安いから買うて地味過ぎ派手過ぎる  
温室の無いベコニヤに貸す庇  
鬼は外 外は隣の窓があり

大阪市 西 川 誓 二

春果先生の著書に捧ぐ

医学博士が世相を診た「聴診器」  
家計簿へ電卓フルに使いはり  
ゴルフゴルフゴルフで盲判

岸和田市 葛城伊三郎

待合室医療無料の人で混み  
隣から移る欠伸を噛み殺し  
坊さんも背広の時は蛸で飲み

米子市 増 田 竹 馬

突然変異学資に悩むハメとなり  
冷戦のほんとは折りたい意地っぱり  
仏にも鬼にもなつて内助の功

竹原市 森 井 菁 居

占いへ妥協しておく旅の酔い（北九州の旅）  
童心をゆさぶる高崎山の猿  
旅をしめくくるパイナップルを買う

堺市 伏 見 茂 美

クシヤミを袖に包んで待つ女  
子を起す時間も同じ壁一重  
逆立ちでもしようか金に見離なされ

大阪市 島 田 雄 峰

子の為に長生きしたら邪魔がられ  
これからもそれからもないくら  
し人の世の機敏にうとく丸められ

笠岡市 出 原 真 奇

何もかも知っているのがつむじまげ  
妻逝って七十五才の骨きしむ  
横道を歩く頑固も俺に似る

東京都 増 田 次 章

新入社員のミスも笑いで救われる  
ライバルの背のび互いに相手立て  
さりげなく肩書きに触れ同窓会

宿毛市 山本窓花

生きている限り明日を織る運命  
里帰り一夜明かして湧く希望  
句誌一冊こんなに深くなるご縁

宿毛市 瀬田美知

ガスの火を切って札所の道おしえ  
肩の荷のおりた軽さが頼りなし  
新築へ余命なんかは思ふまい

守口市 野呂右近

母は縫い子は編み父は書く夕  
テープにて聞く我が声の他人めき  
あれこれと祈るか頭上げぬ老母

倉敷市 稲田豊作

机上論華麗に咲かせ脛囁じる  
生きるには亡夫の赦しを乞うルージュ  
どん底で握りあうのが仏の手

大洲市 堀内暁風

正義感蟠螂の斧振って見る  
おとぼけも上手女将の芸のうち  
ご亭主を飼育している赤い爪

大阪市 津守柳信

口答えしない女にあやつられ

友情へ女の性がヒビとなり  
姉妹が疎遠になって好亭主

和歌山市 沢山福水

鈍行でよし人生の終列車

老人会唄も佗しき枯れ芒

秒針のいつかは止まる日を惜しむ

和歌山市 津田与史

点滴へまだ明日という脈があり

一喜一憂医者菩薩となり鬼となり

五十円が落ちてる明るすぎる道

和歌山市 田中万作

老眼鏡越し夫婦喧嘩に艶がない

もの言わぬ夫のタクトについてゆき

靴音へ気をつかわない妻も歳

美祿市 安平次弘道

親切を都会の人は身構える

雑談はつきたが借金きり出せず

兵庫縣 大江秋月

インフレが過疎から素朴さ持ってゆく

心の糧までインフレ奪い去り

大阪府 今西章雅

合槌を打ったらはたの眼がとがり

腕時計の音聞き兼ねる年となり

別居すりややっぱり不自由身にしみる

高槻市 山田季賛

電話ひと声で今日は休める職を持ち

和泉市

西岡洛醉

沈む陽におとこの実直歩を早め  
悔なき日朝の一步に託し出る

加賀市

細呂木魯木

母なれば六十の吾れを神頼み  
進学へ見栄ではないが親心

倉吉市

渡辺苦句

着陸の途端天国の夢が覚め

残雪を踏んで宿下駄奪われる

貝塚市

行天千代

指定席買うたに列車ガラ空きで

私の傑作けちな子、ぐずな子、  
抜けてる子

大阪市

本間満津子

これももう云うたかと聞いてから話し  
病歴が自慢のような湯治客

松山市

谷のぶお

よい方に向く縁談へ梅の花  
失礼な男でもよい酒をやめ

大阪市

鈴木生仏

節分の豆も値上げでまきもせず  
長生きを自慢するより仕事する

和歌山市

内芝としよ

お祝の席へ着物で迷い出し  
引越した夜は荷物の谷でねる

大阪府 不二田 一三夫  
チェホフをほうり出し 女子プロレスを見る

寄席

あんまりの拍手のあとへ出渡れる

北川 春巢

変声期の蛍の光耳につき

ガム噛んで歯を磨いてる通勤車

ネクタイを贈って派手が気にかかり

流行のケーブ臨月の腹隠れ

句集もう著者を放れて歩き出し

川村 好郎

福寿草葉ばかりになり朝寝する

形無形父母より亨けしものばかり

聞いてあげることしか出来ぬ人と飲み

遠慮ない旅でも定まる夫婦の座

あのひとの本心引き出す鍵さがす

西尾 栞

悼福島鉄児君

黒リボンの額を見上げて対話なし

三分間停車雪のホームの信濃蕎麦

象山の酒心のお湯の夢心地

靴の雪地団駄踏んで落して

雛の目の初恋人に似て楽し

信州路にて(三句)

菊沢 小松園

斬られ役殺陣師の息の引き具合

見られてもよい日の財布投げ出され  
落ち附いた音で納めた棺の釘  
愛人を描いて金に換えられず  
そのかみのからくり血のつながりで言い出せず

若本多久志

この年で癪にさわった言葉尻  
年金の額控え目に言うておき  
顔色で達者な日日をねぎらわれ  
記憶力確か年月日を覚え  
花の名が思い出せないままに咲き

本田恵二朗

春遠し寒さ年々身にこたえ  
誘われてまず辛度いと思う齡  
お車代キッチリ一割 引かれてる  
小言さえうとまし そうか  
ああそうか  
お返しが心に重い品を受け

尼 緑之助

腐っても鯛なら油臭うても鯛  
自由とは退屈なものだと悟り  
毎日が戦いですという若さ  
価値観のズレが溝となり川となり  
友情がほんとに負けた顔をする

正本水客

車絶唱 寒夜をカーブする  
着せ替えをして世に問う孫悟空  
けだものとけだもの歴史を繰り返す  
勝つための選挙けだものになって来る  
網を張るスナック消えたり浮かんたり

浜田久米雄

すぐきの樽ならんで社家も冬に入る  
湯は溝に川に流れて湯煙のなかゆく  
お祝の電話へ起きて風邪をひき  
滅びの美しさを愛して月も欠けてゆく  
すでに仏ではない ひたすらな美しさ

社 告 川 柳 塔 社

四月号からの雑誌選者

「同人吟」選者

「水煙抄」選者

「愛染帖」選者

西尾 榮

菊沢小松園

橘高 薫風

「九輪抄」にかわる第3雑誌の来年度選者は  
正本水客氏をわずらわせます。

新 役 員

参事会々々長

句 会 部 長

菊田いさむ氏は公務多忙で句会部長を辞せ  
られました。

×

「水煙抄・秀句鑑賞」の執筆陣は本号から随  
時かわります。

同 人 集

『川 柳 塔』

残部が七十冊になりました。再  
版しませんので、今のうちにご贈  
答用などに確保しておいていただ  
くよう、おすすめいたします。

・同人吟・

## 秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

もつれ糸はぐす両手もめて

水粉千翁

もつれ糸をほぐすつもりが右派左派ともめ  
いよいよ糸ももつれてゆく現代の政治世相を  
うまく詠んでいると思う。こう云う云い廻し  
はこの作家の得意の筆法である。

祝い客結納ばかりほめて去に

中川晃男

ほめてほしいのは結納より嫁ぐ娘の方だが  
ほめてくれない。結納ばかりほめている方も  
余り結納も娘さんもほめる程ではないが見せ  
られた以上はほめねばと中には軽い嫉妬も胸  
に秘している人もいだろう。両方の心の中  
を句の上に表わさず、感じさせている。

未だ燃える姿でれんたん白うなり

錦織文子

この作者はまだこんな句を詠まれるお歳で  
はないがふと老後を考えられたのであろう。  
燃える心は何歳になっても持つてゆきたいも

のである。句主は失礼ながら以前には表現に  
肩をいからせたところがあり、石を噛む思ひ  
の句があったが次第にそこを突き破って淡々  
と詠まれるようになったと感ずるのに私だけ  
だろうか。

セツト少しくずして私の顔にする

高橋千万子

女性なれば必ず経験され、私もそうすると  
思うであろう句である。今熱心に川柳に取組  
んでいるこの作家はそれを見逃がすはずがな  
い。身辺句の種はどこにも転がっている。発  
見してゆく生活、この生き方は私たちが忘れて  
はならない。それが川柳であらう。

リンゲルの点滴反省の雫とも

津田与史

病床にあつてはじめて詠める句である。そ  
して反省の雫と受け取っていられるところが  
よい。これから大に期待される作家である  
から早く全快されて頑張つてほしい。

お帰りと云う声もなく鍵の音

黒川紫香

年輪を重ねてきた夫婦はこんなものであ  
る。お帰りと云われないのも別に夫に不平があ  
るわけではなく、お帰りと云つてくれないから  
と妻に不満があるわけではない。これで平和  
なのであろう。下五の鍵の音がよく効いてい  
る。流石古豪の渋い句である。

雪しんしん無言の夫婦に重い屋根

岩田美代

紫香さんの句と同じ無言でも少しちがう。  
それを「無言の夫婦に重い屋根」と上五の雪

に合せて下五を締めていることでわかる  
し、この句のいのちである。

初風呂の肌はまだまだ湯をはじく

宮尾あいき

初風呂の句はいくつかあったが、めでたい  
とか、うれしいとかで止まっているが、この句  
はもう一歩進んではほましい句になっている。  
亡夫をいとおしく慕いつつもあいきさん  
はいよいよほがらかに、川柳に生き甲斐を見  
つけていられる姿に教えられる。そうなら  
こんな若々しい句が生まれるのだと思う。作  
った句が多い此の頃、生活から心境からに  
み出た句がやはり魅かれる。

処生術の如く遮断機くぐり抜け

中村ゆきを

遮断機をこんな風を感じている句は少い。  
流石会社の管理職の椅子にあつて東奔西走活  
躍している作者ならこそと思う。何々の如く  
と詠むときは注意しないと説明だけに終つて  
しまう。処生術と遮断機は面白い組合せであ  
る。

其の功を語らず乳房うなだれる

増田竹馬

だれてきた乳房が何人の子を育てあげたで  
あろう。豊かな乳房をほめ、魅せられるがう  
なだれた乳房こそ尊い。世の夫たるもの、子  
たるもの、うなだれた乳房に顔をそむけるよ  
り、感謝せなければならぬ。其の功を語ら  
ずうなだれるとはうまく詠んだものである。  
妻たるもの、母たるもの、卑下せず大に胸  
を張つて下さい。

俳風柳多留廿五篇研究

一(五)一



紀内恒久

85 豊といふ姓を貰ふとひとりまへ

西原「歴史年表」によると、秀吉は天正十四年に太政大臣となり、豊臣の姓を下賜されている。それまでは、「羽柴」と名乗った。これは丹羽と柴田の寄せ集めである。豊臣となつて漸く一人前というわけ。

入江一名取りを詠んだ句。豊後節などで師匠から豊春などという芸名をもらえば、もう一人前である。

清入江説に賛。

八木同。豊竹〇〇太夫、豊名賀〇〇太夫。

『声曲類纂』にこの種の名多し。姓であるから上につかないとまずい。

腰本に出はぐり豊の字を貰ひ

宮二・10

青木秀吉説に賛。その方が句の内容のひろがりを感じさせる。

西原 亮・入江 勇・紀内恒久  
鈴木 黄・清 博美・青木迷朗  
室山三柳・八木敬一・岡田 甫

岡田入江説。動かず。八木氏の引用句でもわかる。

秀吉は姉川の役の合戦の功勞によつて、初めて江州長浜十二万石の城主となり羽柴筑前守。これで、すでに一人前になっているのであるから秀吉の句とは思えない。

86 和尚化して本田となるいす、川

西原一伊勢神宮参拝に、今時流行の本田まげをつけ変身する和尚。坊主頭にチョコンと本田をつけし姿はふん飯ものである。

つけびんを神鏡で見て笑ひ出し 安八・桜1  
御参宮和尚あつぱれ能いおとこ 安六・桜4

室山一賛。僧形では神域にはいれなかった。

「……化して……となる」はよく出て来る句

調だが、何かによつているのであるうか。

入江一賛。参宮の僧侶は御師の宿で附けびん

をしてから参詣した。

付けびんで涙こぼるる歌をよみ 五五・5

(西行、何事のおはしますかは知らねども 忝けなさに涙零るる)

岡田同。なお室山氏のご質問「……化して……となる」というのは、「山海経」の「腐草化して螢となり、山の芋化して鰻となり、雀海中に入つて蛤となる」等々の盲説の文句を利用したものです。

87 唐からの直段で品がげびる也

西原「唐からの直段」はわけのわからぬ直段のこと。「唐の漢文・唐の横町・唐人の申し子」などあるし「唐人」とても道理のわからぬ人をののしつて使われた。

品川は、吉原とちがつて細見もなく、飯盛りすぎぬので、いいかげんな直段であり、

吉原より下品であると。

室山——「広辞苑」によれば「唐の横町」は、所在のわからぬ地、とあるから、「唐からの直段」は礎解通りであろうが、「品は」でなく「品が」なのだから、それをすぐに品川へむすびつけるのはいかげなものであろうか。この「品」は、やはり品物の意であろう。

入江——礎稿に賛。唐——中国はすべて銀本位なので品川遊女をいった。

海道一の遊君は十匁

飯盛を秤にかけて十匁

宮一・25  
一七・10

など、銀十匁であらわしている。それを「唐からの直段」といい、吉原にくらべると、飯盛だから女郎がげびるのである。

紀内——礎稿のように考えていました。

青木——「唐からの直段」不明。

岡田——難句。未解。宿題とします。

83 亀の子へきもをつぶしてうそをつき

西原——「亀の子」は花柳界のことばで、八客が蒲団の中で相手の女を待っていることをいうVと『日本国語大辞典』にある。

吉原で、名代の新造か、または、まわしで遅くなってきた妓が、野暮な客にすこまれ、得意のうそで懸命という場面。

室山——猿の胆の話がある。竜宮の乙姫様の病気に猿の生胆が必要とあって、海月が取りにゆくというものである。猿が鳥の木の枝へ干

し忘れたといったので、再び鳥へ引っ返し、まんまと猿に逃げられるのだが、これを海月とせず亀とする話もある。主題句は、海の真中で亀に実情をうちあけられ、「きもをつぶした」猿が、とっさに「うそをつ」いて難を逃れる、というのが主題句ではなからうか。「（驚きのあまり）きもがつぶれた（ので役に立たない）」といって亀をこまかす話もあったように思う。

入江——礎解がおもしろい。

八木——室山氏説賛。

けつかうな所さど亀ハたぶらかし  
竜宮で猿は真赤な嘘をつき

青木——室山氏に賛。『日本随筆索引』に「猿の生胆の話」（燕石雜誌）、「猿欺虬不与肝」（松屋筆記）、「猿の胆取」（護草小言）などなど。

干し物がぬれますなどと猿は泣  
竜宮の木戸へ猿と海士無用

岡田——室山説に賛。礎稿で引用の隠語は江戸ではない筈、明治以降と思う。目下刊行中の『日本国語大辞典』は小生所持せず。見ていないから何とも云えぬが、江戸時代のは遊里語、明治以降のは花柳語と区別している筈です。明治の隠語を江戸文学の解釈に使用は感心しません。

89 あハアれなおとであさつけ隠居くひ

西原——「浅漬」は、大根を生乾きに干したのを、麴・糠などを入れ、大根百本・塩一升といふくらいな薄塩であつさり漬けたもの。パリパリと食べることでできない老人である。うま味半減というところ。

勇力をふるひ浅漬出して来る

室山——賛。歯がダメ。噛む音が味覚の大部分をしめるのに……。

岡田——同。

90 蓮の葉の上へ書出し置て行

西原——蓮の葉は、お盆のために求めたものである。その上へ、書出し（請求書）が置かれている。盆の節季払いを巧みに表現した佳句である。

室山——「蓮の葉」——（書置（遺言））の連想を「書出し」に持って来たところがミソとは、考え過ぎか。季節感のある句である。

入江——礎稿、うら盆の掛取り説賛。

八木——自信はありませんが異説を一つ。不忍池の茶屋。

えり蓮の上へ書出し置て行  
蓮のめしふたあり前で壱分なり

青木——八木氏説「不忍池の茶屋」に賛。

岡田——出合茶屋に賛。不忍池に突出して建てられているから、障子を開ければすぐ蓮の葉。

# 麻生路郎物語

(4)

——つつましき川柳結婚——

東野 大八



路郎先生と霞乃先生  
(米本貴志子さん方  
で撮影・年代不詳)

とといったいわゆる五葉調が仲間内でも評判の  
好作家だった。

「彼と初めて顔を合わせたのは、明治三十  
九年夏、平野町五二樓楼上の川柳大会で隣り  
合わせてからである。私の市岡町時代(上京  
直前ごろ)は、五葉君は市岡中学前に住んで  
いたので、気軽く行き来しあった。上京して  
からも毎日のように通信しあったものだ。彼  
の虫メガネでみるような細字が懐しい」

「矢車に出句をすすめたのも五葉君で、おか  
げで東上した際、矢車の荷十君の世話で下谷  
の下宿屋に落付くことができた。その息子  
が一時川柳を作った高野京雨だった。京雨  
は三太郎君の従兄弟だともきいた」(山雨樓々  
モ)

その「矢車」も路郎の東上した年十一月に  
廃刊。このとき「滑稽文学」(読者謝罪文)も  
この年七月に廃刊し、東京の柳誌は完全にそ  
の姿を消滅させてしまっていた。「矢車」廃  
刊のころは、青明、五葉、半文銭、水府、緑  
天、地神佐竹、路郎が主力同人で、いわば大

阪の柳人が東京で柳誌を出しているような形  
になっていた。若い路郎にとってこんな東京  
の空は、ひどく侘びしいものに思われたこと  
にちがいない。在京中、折をみては大阪へ馳  
せ帰っていたようだ。図らずもこの帰阪の一  
ときに、運命的な河盛よしの(のちの麻生霞  
乃)との出会いとなるのである。

「霞乃さんは大正元年ごろ、当百庵の句会  
に父君河盛芦村氏とともに姿をみせられ、当  
時の若き川柳仲間と相当な渦をまき起してい  
たものであった。当時、霞乃さんは二十才、  
まだ肩揚げもとれていなかった。おさげ髪に  
したり、桃割に結ったりしていたが、みるか  
らにミッシェン風の地味な女の子だった。若  
い連中は作句どころでなかったらしく相当な  
悩まされ方であった。父君つきつきでざりと  
てどうしようもなかった」(昭和六年五月号『む  
さし』大阪版より)

「大正元年路郎は東京からひょっこりと大  
阪に戻ってきて、当百さんの二階で開かれて  
いる小集句会へ突然に姿を現わしたのです。

路郎が上京したのは明治四十四年八月十五  
日である。ときに二十四歳。勤め先は学校の  
友人の生家である樋口金屏風店であった。も  
っともその東京生活も足かけ三年で終る。  
このころの柳友で最も親しかったのは、浅  
井五葉である。路郎より六つ歳上で銀行員だ  
けに、如才なく世事に長けた人柄が、学生路  
郎にとっては、からめてから肌のぬくみを感じ  
させたのであろう。

——糖袋いわくあんたはお妻か  
——行倒れ成程という姿にて  
——大仏の鐘杉を抜け杉を抜け

出席の皆さんとは顔なじみのようでした。この時が私との最初の出会いでもあったのです。当時、当百居での小集句会のメンバーは十人足らずで、俳人鬼史柳号柳珍堂という川柳のうまい作家も出席されていました。そのほかに浅井五葉、木村半文銭、川上日車、岸本水府、藤村青明、蚊象さんもおられたか、覚えていません。まだ俳人で宗右衛門町のお茶屋の主人だった藤原遊魚さんも時々見えていました」(股乃書簡)

「はじめて彼と出会ったときの印象ですが一口に申しますと、まるで『おじさま』みたいな感じで、齢より相当に老けて見えました。父芦村に、私を妻にと申し込んだのは、初対面からしばらく経ってからだと思えます。

私の条件としては、父と一緒に暮らすことができれば、お受けしてもよい、ということでした。娘一人、親といえはすでに母はなくこの父だけでしたから、父と離れて暮らすことは当時なんとしても厭だったし、若い私としては考えられない事でした」

昨年、生駒市で直接筆者が訊いた、これが彼女の結婚当時の感想であった。

結婚式は大正二年四月九日、西田当百夫妻の媒酌で、河盛芦村、よしのの親子二人で暮らしていた観南通りの家で、日ごろ顔なじみの当百家に入居する川柳人や、双方のわずかな縁故者を招いてつましく挙式されたのである。新郎新婦の新居となったのもこの家だった。

この路郎が句会の女王(クイン)を射止め

たということ、その時点でかなりのやつかみやそねみが当然のように発生している。その根拠もない憶測の中に、路郎が水府と、葭乃に「恋のサヤ当て」を演じ、結局路郎がライバルの水府を蹴落し、恋の勝利者となったというデマがとび交ったことである。このデマは愕いたことに、今なお旧柳人の間では、伝説的の話題として生きながらえていることである。そこで筆者は、この点についての真相を生駒市のご当人に訊してみた。直ちに過ぎの如き返書が到着した。

お訊ねのデマの震源地について、私の知っている範囲のことを申し上げます。それは遠い遠い昔のことですので、私にもハッキリはしていません。

たしか北方の地方柳誌『猫柳』だったと思いますが、もしまちがっていたら、他の柳誌であるかも知れませんが、調べてみないとわかりません。とにかくこの柳誌の消息欄(川柳塔からいえば柳界展望のようなところ)に二、三行ほどの記事が掲載されたことがあります。

何が書いてあったか、私は馴れぬ家の仕事で忙しくしてしましから読む暇とてなく、くわしいことはわかりません。或日水府さんはその柳誌を持ってくれた新居(観南通り)へ来られました。そして問題の記事のあるページを路郎に見せながら

「これどう思います。僕はこれをみて第一今後この家とはどうなるのかと思うと心配

になったので、やってきたのです」

とさも困ったように前額部の髪の毛を、右手の親指と人さし指でつまみ上げた。これは水府さんが困った時に必ずする仕草なのです。

「僕どんな冗談を言ったか知らんけど……」と水府さんは、そう言葉をつぎました。

「こっちは教育者の娘なのだ、これは困る——これは訴えよう」

と路郎はムツとして言いました。

「そんなむつかしい事はやめときまひょうや、僕が辛抱したいならええのやから……」

と水府さんは答えました。

実のところ、当時の私としては水府さんとは、句会のように顔を会わすだけで、別に個人的おつきあいをしたことは勿論ないので、ですから私自身、この二人のやりとりをそばで聞きながら、路郎がそんな大仰なことを言うのに、内心おかしく思ったぐらいです。こんな遠い昔のことが、今だに私の知らぬ人達の間で尾をひいているのかと思うと不思議でなりません。

その後のことですが、水府さんの結婚式の日、花嫁さんの中宿を私方で行ったもので、お互いに住居は近かったものですが、絶えず行き来をしていました。水府さんのお母様もまだ御健在でしたから、私はご近所づきあいをいたしました。路郎も水府さんとは川柳人のお友達でありました。半文銭さんのお宅も半丁たらずのところにあったのでした。

告訴する、いや、やめときましようという

路郎と水府さんのやりとりには、よくこのふたりの男性の性格がでています。路郎と水府さんとは、性格的には何もかも反対でした。

水府さんは人が不快に思うようなことは、直接自分の口から言うことは避けていられた。それに反して路郎は、正しいと思った事はきられようがどうしようがズバズバといいくい事を主張するので、誤解もされ易く、多くの敵を持っていました。強い味方もありましたが、それはごく少数であつたでしょう。従つて柳詰の運営につきましても、主義主張を異にしていました。そんなわけで、仲の良い柳友でありました。ことごとく提携しにくい点があつたのです。第三者の眼からみれば、互いに反目せねばならぬ感情のもつれがあるかのように邪推されていたかも知れません。私から申しあげる事はこれぐらゐしかありません。

結婚後三年目のことになるが、山雨樓メモにつきの路郎夫妻の句会報が記されている。(結婚とともによしのは直ちに柳君を蔑乃とした)年代順からはみ出るが紹介しよう。

「番傘の大正五年八月号をみると、麻生夫妻に一頁を提供し、優遇している。そこでは蔑乃・路郎と並べお睦じいとをみせている。その中の主な句を紹介しよう。

罪の値は汗なりと鉄をとり 蔑乃  
— アダムエバ猿股という知恵がつき 同  
— 基督は今日も手品を一つやり 路郎  
— 私生児だのに聖霊にしてしまい 同

— サロメにも困るとヨハネ堅いこと 同

まだ路郎調は完成していないが、進むべき道が番傘とは異っているのがほの見える。

このころから路郎は「番傘」から遠ざかり「土団子」や「雪」が生れた。「川柳雑誌」の創刊はそれからずつと後のことである」(昭和六年三月号「むさしの」川柳雑誌の句・近藤館ん

基督の句が出ていたので、ここで路郎夫妻の洗礼名をあげておこう。路郎のクリスチャンネームはヨハネ。蔑乃はルツである。路郎が図らずもこのようなイエスの輪環の下についたのはもとより花嫁の影響である。

蔑乃は奈良県立桜井高女の二年から大阪に移り、大阪私立相愛高女に転校し、これを卒業後、大阪川口町にあつたブル女学校の英語専修課に学んだ。相愛高女は、御堂さんが設立した仏教学校だが仏教色はうすい。生徒は島の内や本町の閑屋すじの娘さんが多かつた。それだけにちと贅沢なエリート女学校であつた。一方、ブル女学校のスペシャルクラスは、生徒が五、六人だが教師は外人でカナダやロンドンの宣教師格の人たちが入れかわりたちかわり教壇に立つという風で、修道院なみの教育ぶりであつた。毎朝三十分は礼拝、半時間はバイブルクラスで、毎日聖句を一句ずつ暗誦させられていて「あの人はハンサムだなあ」と訓育された。「人右の頬を打たば、左の頬もこれに向けよ」と無抵抗主義を教へこまれた。このため、腹立たしさも、

次号  
予告 「河盛仁平噂ばなし」

ドラマは蔑乃女史の尊父、祖父に進展していいよ佳境に入る。ご期待を乞う

人を疑うことも知らずに青春期を過ごした、と述懐のあとに――。

「学生時代には毎日曜日にかかさず京町堀の聖台会へ行っていました。結婚後は俗事におわれてひまのない生活でしたから、教会へは次第に足が遠くなりました。今はその教会も戦禍でどこへ行つたかも知らずに過しています」(蔑乃書簡)

仏門を経てクリスチャンに、神仏への奉仕を誓つたはずのこの妻にやがて思いもかけぬ川柳人としての洗礼が生涯のものとしてその身を押し包んでしまうことになるのである。

ツルゲネーフの「女の一生」や、チエホフの「可愛い女」にも似た蔑乃の「女の一生」は、路郎という型破りの男性を夫と定めたことによつて、はからざる運命の波瀾に翻弄されることになる。麻生路郎・蔑乃夫妻のその人生への門出は、まるで十字架の刑柱を重たく背負つてゴルゴタの丘に向ふあの聖画にも似ていよう。そのクリストの頭髪をからみつけたその荆冠―それこそが川柳そのものののである。ともあれ、本名河盛よしの―その前世もまた数奇をきわめた家門のドラマがそこにあつたのである。

・水煙抄・

## 秀句鑑賞

—前月号から—

香川酔々

秀句とは、いったい何だろうという疑問がある。ある人は、いつの世までも残る句が秀句であるという。とすれば、どの句が残るのやら、とても生きているうちにはお目にかかれそうもない。

先だって、多くの人の共感を得られないのは川柳ではないなどと言った人がいた。

これもおかしい。多くの人は、いったい何人ぐらいの人のいうのか。ばかばかしいのほどがある。

川柳は自分のためにつくるので、人のためにつくるものではない。格言ではあるまいし。路郎先生は「人間陶治の詩」と教えられたが、人間陶治の格言とか、人間陶治の断章などとは教えられはしなかった。

あくまで川柳は詩であるのだ。  
そこで、筆者なりに、秀句鑑賞は、その句に「作家独自の目が働き、かつ詩心が満ちていると思われるもの」を秀句としてとり上げ

たいのである。

川柳の幅は広い。伝統やら革新とやらさわがしい。そんなことは知っちゃいない。

川柳は、森羅万象、何んでも詠める幅の広いものであると思えばよい。

では水煙抄拝見。時事吟的なものからあげれば、

帰休とは知らずみやげへ子ははしき 絃  
狂乱のクリンパバの頼りなさ 同

この二句が佳い。他にも時事吟があったが報告に終わっている。

次はスケッチ風の作品。作者の目がとくに感じられて、好ましい作品が多い。

舞う雪が波に抱かれる十勝川 露子  
(抱かれるという表現がよい。十勝の雄大な景が想像できる)

風変わりな凧もあがって初春のどか 放人  
一輪の貴様示す冬の薔薇 古啓

(前者は素直な表現が好ましい。後者は、冬そうびの重厚さをうまく捉えている)

冬の陽に母の温りあった墓碑 幽玄  
(母恋の見事な表現、さすがベタランの作である)

手探りに黒豆を煮る核家族 貞祐  
(核家族を詠った作品は多いが、正月準備の黒豆とのとりあわせはおもしろい)

不断着のままで寝ている主婦の風邪 隆子  
割箸を妻も同んなじ音で割り 曲ん手

大晦日硯の蓋も拭いてやり 松花  
(以上三句、生活のおいがまざまざと感

じられる作品。作者の思いがこもっている)

感覚的な句は少ない。もうすこしあってもよいのではなからうか。

欺されて欺して振子のかみか 葉子  
ある炎狐独の殻で燃えつつ 昌道

勿論、感覚的な句は作りすぎると訳が分からなくなり、独善的なものになりやすいのは事実である。この当たり、作家にも、またそれを選ぶ選者も苦勞することになる。

しかし考える作品も亦楽しいものである。次は穿ちの句。穿ちについて路郎先生は、次のように説いておられる。川柳でいう穿ちに近い語に英語のインサイト (insight) という語がある。「内を見、奥を見、本質を見る」という意味であるから「川柳は世態人情の機微の内を見、奥を見、本質を見る」と解することが出来る。また「看破する、洞察する」という意味をもつことから「川柳は世態人情の機微を看破するもの、洞察するもの」と解することもできるものである。

さて、穿ちの句をつくるのはむずかしい。まちがうと、標語や、しょうのない皮肉だけのものとなり、詩としての味がなくなる。スペースがないので、別記してこの稿を終わる。

薄情と自分のエゴを棚にあげ 利美  
冬の陽がもったいなくて糸をたれ 無人

染そうな儲けに見えぬ駐車場 保  
家中のモーターのような母の位置 貞雄

電話ボックスブライドが捨ててある 葉子  
実印を捺すようパパ似の子が生まれ 溥子



菊沢小松園選

大阪市 堀 口 欣 一

鬘ものは屋号で呼ばれ前進座  
刑務所に近く開運橋があり  
哀れ恍惚菩提寺の名を忘れ  
病院長逝去他人の病院で  
京はよし看板に見る陀羅尼助

豊中市 高 橋 古 啓

糸先を持たされてからの風になり  
昼も夜も嫁のリズムになりました  
古木ほど燃えもしようぞ燃すべし  
寝て待てば夢は夢で終ります

大阪市 小 谷 清 女

ささやかなつり銭善意の箱でなり  
水ぬるむ春待ち顔の金魚鉢  
古き良き時代素直に聞かぬ耳  
好き嫌いなくて私が有難い

柏原市 小 谷 葉 子

後ろより従う私となっている

微量だが失うものと湧くものと

口紅の色まで味方にする女

あいまいな運命線で来る四月

苛つ事多く飲めない酒を酌ぎこぼし 大阪市 稲 本 凡 子

一言の多きを悔いた日記閉ず

父の日に父の無い子の日記帖

聞き役に廻ってへった風当り 大阪市 神 夏 磯 道 子

戦いに背く日の丸は美しい

温かい言葉へ温かい返事くる

ぬれた来た新聞 少年叱るまい

自分まで騙せる嘘が見つからず

不景気の風アルバイトにもまとも 岡山県 長 尾 保

背伸びして日蔭の花のやつと咲き

好不況かわりはなく花ひらく

岸和田市 池 田 露 子

好不況かわりはなく花ひらく

岸和田市 池 田 露 子

幻想の白鳥が舞うトウシューズ

熊本市

有

働

芳

仙

せまい日本みんなが急ぐので急ぎ

辞表手に社長と一対一で立ち

出世した自伝の裏で泣く女

大和高田市

岸

本

豊

平次

足向けて寝ていましてと煽てられ

前衛も松の緑を初春にいけ

日の丸と軍歌が覆う敵傍山

八戸市

安

田

紘

暦では立春灯油の値にふれる

道しるべ手造りだから離さない

完全主義恋の踏み絵にけつまずき

今治市

葛

本

昌

道

風邪押して押して生活の城守る

今の世のやくざに欲しい百叩き

映倫の幕がボヤけて来たボルノ

島根県

飯

塚

虎

秋

晩酌がちよこ一杯に老い込めり

叱られた同じ文句で部下叱り

雪道の父を追いつく子

島根県

松

本

文

子

孤独ではない足跡がついてくる

哀しみは凍るつららの先までも

傷心の夜はふるさと抱いてねる

聞けるかい風とたたかう風の声

保護色を着ぬとしゃべれぬ弱虫め

一隅を照らす灯　ときには消えそうで

尼崎市

中

谷

利

美

それ以上聞くほど俺も野暮でなし

お迎えは年の順には来てくれず

棚卸し聞えたらしい咳ばらい

羽咋市

三

宅

ろ

亭

幻想を吾へに与えて露のとう

不等沈下オイルタンクだけでなし

草餅が届いたらしい娘の電話

松江市

梅

本

登

美也

その昔娼婆で鳴らした寺男

病人をはかない嘘でねむらせる

壇家もう尼の乱れを知っている

吹田市

藤

原

世

史春

老という字がひっかかる年になり

卓袱台が静かになったわが初老

友もなく襖にあたる冬の蠅

高槻市

山

田

スミ

子

歳の差は争えず互に持つ意見

賽銭に一円玉が有る不況

八尾市

堀

川

主

税

風邪ひくとしかりながらもかけ布団

岡山県

白

岩

文

衛

茶を入れて話待ってる老いた母

和歌山市 秋 月 宏 方

一つずつ陛下と同じ年をとる

火鉢の火どこか明治の匂いする

今治市 渡 辺 伊 津 志

賞めようもあるものさすがプロの舌

分譲地隣と違う土の色

河内長野市 井 上 喜 醉

愚痴云わぬ母親父を信じ込み

妻になりやとわかった親の恩

岡山県 船 越 洋 之

腹芸に弱者はいらぬ気を回し

二階から笑いの渦が降りてくる

新見市 吉 田 落 猿

死亡欄増えてわたしの年前後

高千穂が聞えて来そうな建国日

伊丹市 檜 谷 漫 柳

電車スト三ヶ月前から予告され

合格をした気で校内見学し

姫路市 大 原 葉 香

金脈のかけらでもよい庶民です

おしゃべりの余韻残して女下車

大阪市 新 川 貞 祐

年金へ生きてる証拠の判もらう

祇園会や五階にヌツと鋒の先

東大阪市 坂 東 若 芽  
水仙の試鍊暖房きつ過ぎる

もみじの掌合せて祈ることおぼえ

新潟県 高 野 不 二

寺の地所借りているのがやきとり屋

宝くじやっぱり当らぬものだった

鳥取市 大 塚 豊 生

成人着脱いで働く娘に戻り

思い出の一つ一つが捨てさせず

高槻市 竹 内 花 代 子

仏様お花も高うなりました

かす汁の湯気へ眼鏡の玉を拭き

羽曳野市 麻 野 幽 玄

間違えへホッと受話器を置く深夜

寝不足も癒して風邪の床を上げ

堺市 栗 本 藤 持

炬燵して明治を語る妻も年

片半身病みて左の筆初め

寝屋川市 江 口 度

不況不況学生勉強し始める

目の前をゆっくりチャンスが通り過ぎ

鳥取市 勝 山 紫 安

上機嫌女の顔で妻笑い

物音もたてず深夜の雪積り

和歌山市 檜 村 ふ み よ

徒歩競走雲反對に走り出し  
年金の暮しさみしい市場かこ

尼崎市 大垣 たもつ

建てかえる役所の窓は高くなり  
トイレまで追うてくる子を遣される

兵庫縣 高橋 近江

来てご覧あなたを待ってる何かある  
狂う世へ老いた迷い子佇ち止まり

名古屋市 大 林 曲ん手

孤児とても火中の栗は拾わせず  
無為徒食鳶は頭上へ輪をかかず

弘前市 小山内 貞男

手放してほめた息子にそむかれる  
糠漬の石の重みに堪えた味

鳥取市 松本 永治

御目出度い席を借りての喉が冴え  
受けて立つ気のネクタイきつく締め

今治市 古野 伶人

日の丸はうちだけ雨のお正月  
惜しい人死なせた河豚を食べたがり

今治市 真山 国彦

家の味噌実家の味噌と混ぜ加減  
白足袋を穿けば閑人かと思われ

今治市 大 本 パット

総入菰豆がかめるはひと所

雲に聳ゆる 歌うて孫を抱き上げる

諫早市 江副 二牛

子守唄母の背中の広いこと  
旧道の由来も聞いて箱根越え

鳥取縣 加藤 茶人

マイホーム担保のままでまだ続き  
出世した証摺代筆で賀状来る

鳥取縣 林 露杖

神戸市へ旅す

汽車の旅隣りはトリスこちら灘  
栄養は満点躰はいま一つ

寝屋川市 柴田 恵美子

太古から虫は一つの顔で生き  
ポケットの位置替え当店オリジナル

和歌山市 吉野 久子

信念で行く我が道が恵方かも  
子沢山亡父の躰生きている

豊中市 安藤 寿美子

風花の中で新芽のたしかなる  
長電話互をたしかめ別居中

大阪市 横地 正彰

週五日など云うとれず老いの職  
突然の吉報足が地につかず

米子市 江原 良二

大阪市 村島 秀村

故郷の母は重たい石の下

大阪市 内

藤ますえ

カレンダーに妻だけ判る符号書き  
尼崎市 駒

村 岳 麓

労使足して二で割る知恵も尽きたスト

大阪市 花

東京都 大

工 千代子

悠々自適なんて水鳥のことか

大阪市 浜

田 繁 子

親友もライバルになり舞扇  
東京都 川

口 俊

等級も知らず稲穂はよく実り

大阪市 須

西 駒 子

子を死なせ忠義は重くのしかかり  
鳥取県 伊

藤 静 枝

未来への灯ともす程の歳でなし

備前市 武

浦 つ ね

しあわせな夢のひろがりあたためる  
松江市 岡

崎 雪 美

公園の日射を避ける婦人デモ

寝屋川市 福

内 雅 堂

下馬評に炬燵の囲り花が咲く  
出雲市 藤

井 晴 月

嗜みしめたあくびの余韻を夫が受け

東大阪市 崎

富 隆 子

やっと逢うよろこび何から話すやら  
鳥取県 福

田 保 子

出る幕がなく紋付の色もあせ

七尾市 松

山 美 子

たい焼屋歩道を狭くせまく売り  
新潟県 市

川 一 峯

程々の公害市政を明るくし

橿原市 西

高 秀 峰

賽銭をケチって柏手でかく打ち  
堺市 堀

畑 日 々 子

暖房のコントロールも平社員

今治市 渡

本 保 夫

忌もあけてやっと紅をさしました  
鳥取県 福

田 陽 山

福は内隣りと敗けぬ声にする

愛媛県 小

辺 南 奉

暗い空旧正らしくばたん雪  
倉敷市 高

山 み どり

急に来た寒波つぼみをあわてさせ

今治市 園

山 悠 泉

謹呈はどこどこにする広い友  
島根県 岩

田 三 和

ジャンケンで決める勝負はプロになし

部 正 則

春をよぶ森の小人は踊り好き

竹原市 鈴  
そつとしておくよりほかにない無口

滋賀県 柚

カレンダーの美女といつもの独り酒

島根県 堀

仏壇も家風も持たぬビルに住み

富田林市 中

この道のシグナルに杖が泣かされる

今治市 伊

鬼の面作つて帰す幼稚園

今治市 今

相当に溜めた噂の嫁かず後家

宝塚市 吉

一時間がとつても長い一人旅

西宮市 朝

木 かつ子

梅だより今年も余世楽しまん

大阪市 平 井 露 芳

木 踏 草

眼鏡新調夜景きれいに魅えり

八戸市 島 田 昭 治

江 蓮 露

候補者の腰の低さにとまどいす

鳥取市 岸 本 無 人

村 優 優

口下手がほめれば一言多すぎる

泉佐野市 大 工 静 子

藤 一 郎

明治生れ耐える事だけ教えられ

高知市 竹 崎 寛 子

井 松 花

名曲のやすらぎをきく横になり

堺市 檀 野 茂 子

田 とんぼ

神様は虎に見事な皮を着せ

岡山市 西 田 溥 子

山 千世子

金婚へ愛と誠のパーフェクト

## 交代の弁

菊 沢 小 松 園

時が流れてまた私が水煙抄の句を見ること  
になった。素より編集局の方針であり命令で  
もあれば否とは言えない。巷間選者交代はみ  
だりにすべからずと言う人もあればまた時々  
は交代する方よろしと言う人も居る賛否は何

れの社会でも同じで何ちらとも言えぬ。選者  
も人間であるから虫の好くのもあれば虫の好  
かないものもある。やつと呼吸のみ込めた時  
に代られたのでは、げつそり力落しの人もあ  
るうがなかなか息の合わない選者で代つて  
貰つて本当にほつとしてゐる人もあるかも知  
れない。そんな人には代つた次号で何もしな  
い次の選者が歓迎されるかも知れないこれも  
運不運で人間の幸不幸など、何処に転つてい  
るかも知れないとおもう。これも一つの組の  
上に乗つた魚同様前世からのさだめとして眼

を閉じて暫らくの間、私のなすがままに任せ  
て貰いたい、あなたの句の爲め、広く常識の  
府の川柳界のため、よかれと願ひこそすれ、  
邪道に走ることも無いと心に契つてゐる、そ  
う無惨に盲打ちに、八方破れには望まれても  
ならない心持でゐる。  
会えば談笑の中に不審を訊す友情だけは持  
ちたいものと願つてゐる。  
「お願い」―色の淡い鉛筆書きは選者も校正  
子も困ります。ご注意ください。  
(水煙抄選者)

# 百人一首と川柳 (10)

富士野鞍馬

## 一八 藤原敏行朝臣

すみの江の岸による浪よるさへや  
ゆめのかよひ路人めよぐらむ

(古今集)

敏行は藤原富士鷹の子で、名家の出であるから、早く官位も進み、藏人頭、右兵衛督になったが、延喜七年(九〇七)二十七才で死んだ。若くて能書家であった。三十六歌仙に入れられている。

この歌は、寛平の御時后宮の歌合せに詠まれた恋歌である。寛平は宇多天皇、后宮は宇多帝の母君である。その文句を取って川柳は住の江につくと月落鳥が啼

住よしの岸によるさへ岡釣師  
名乗 (二八三〇)

と詠んでいる。住の江は今の大阪湾である。

## 一九 伊勢

深草 (七〇一五)

なには渦みじかき声のふしの間も

逢はでこのよを過ぎてよとや

(新古今集)

伊勢は、藤原継蔭の娘で、父が伊勢守であったのでそう呼ばれていた。はじめ藤原仲平(真信公の弟)と恋愛したが、のち宇多天皇の寵をうけ、行明親王を生んだ。それからちまた、十才ほど年下の宇多帝第四皇子敦慶親王と恋愛して、才女中務を生んだのである。没年は六十才ぐらいだっただろうと推定されている。

いせはみちかく法性寺長すぎる

(安九宮二)

「伊勢」は二首であるが、法性寺入道(七六)はばか長い。

はま萩と伊勢よみそな所也

二葉 (三七三五)

浜萩を詠みそふな伊勢を詠み

梅島 (六〇二三)

浜おぎを他国の名にていせはよみ

窓梅 (二六二)

「難波の声も伊勢で浜萩」といわれているので、右の歌は伊勢が「声」と詠んだのに興味をもって。また文句取りの川柳にあはで此世を過してしやぼん壳

素行 (二三三)

粟で此世へ浪人は召出され

梅島 (二六一〇)

などがある。この浪人は佐野源左衛門を詠んだのである。

## 二〇 元良親王

わびぬれば今はたおなじ難波なる

みをつくしても逢はむと思ふ

(後撰集、拾遺集)

この歌の文句を借りて、

佗ぬれば以後たしなめと親父折

千之 (二四〇五)

佗ぬれば今はた同じ御借金

秀月 (六八二九)

身を筑紫でもあはんとぞ梅はとび

加丈 (五七三〇)

一道真の飛梅

と川柳に作られている。

元良親王は、陽成天皇の皇子で、三品兵部卿、式部卿になり、天慶六年(九四三)五十才でなくなられた。

この歌は、後撰集に「事出で来てのちに京極の御息所に遣はしける」と詞書してのせられてある。京極の御息所とは宇多天皇の女御で、親王はその女御と通じたことが露頭した

のを「事出で来て」といったのであろう。

元良といせを下女また取ちがへ

梅風（六二）

伊勢の歌にも「難波」「逢う」があるのでよくカルタを取りちがえる。

## 二一 素性法師

今来むといひしばかりになが月の

ありあけの月を待ち出でつるかな

（古今集）

素性法師は、俗名を良岑玄利<sup>よしみな</sup>といい、良岑宗貞（僧正遍昭）の子である。清和天皇に仕えて、右近衛将監になったが、父の意に従つて出家し、権律師に任ぜられた。三十六歌仙の一人である。

有明は四ツ一ト声ほととぎす

竹子（一五四二）

百人へ有明たった四つなり

和里（四六五）

## 近作

名古屋市 鈴木可香

こと露見大物さすがたじろがず

弁論会青年スポーツシャツで立つ

手を締めるまでは売手と買手なり

大洲市 米沢 曉明

南国のこころ嬉しい土佐日記

と川柳に詠まれ、「有明」を詠んだのは百人中この外に壬生忠岑（三〇）坂上是則（三一）後徳大寺（八一）と四人である。

膝の下から有明の月が出る

楚十（七四八）

はカルタ取り。

## 二二 文屋康秀

吹くからに秋の草木のしをるれば

むべ山風をあらしといふらむ

（古今集）

文屋康秀、字を文琳といった。天武帝の皇子長親王の子孫といわれている。六歌仙の一人である。子が朝康（三七）である。

この「吹くからに」の歌は「古今六帖」には、朝康の作となつてゐる。

右の歌は、秋と嵐を詠んであるので、

康秀は二百十日に一首よみ

亦桑（五四四）

以下次号立読み本を伏せるとこ

北国の雪を聞き聞き蒲団干す

岐阜市 市川 鱗魚

老いの身のふれ合い梅の酒でよし

平均寿命貧乏神との縁ものび

つきつめて言えば他人の壁があり

掟古き母あり里の仕事部屋

花便り噂の人の喪に出合い

と川柳に作られている。

康秀を目掛けるけちな歌かるた

洗路（二三）

むべ山の風に手と手のむら落葉

江山（二四〇）

むべ山の中へ嵐の年始客

よしは（二二二）

寛政のころ流行した賭博の一種に「うべ山」というのがあった。

文屋の女房ふくからにまあおまち

松歌（一五四九）

というバレ句もある。

## 二三 大江千里

月見ればちちにものこそ悲しけれ

わが身ひとつの秋にはあらねど

（古今集）

この歌の文句を借りて川柳は詠んでいる。

月見れば千々に妾はかなしかり

高麗（二四〇二）

座敷牢千々に物こそかなしけれ

薩川（三五二）

月見ればちちに悲しき御後室

摂州（傍三八）

と、いずれもさびしさをいっている。

千里は、大江音人の子で、漢学に通じ、和歌にも巧みであった。延喜三年（九〇三）に

兵部大丞になったが、没年はわからない。

宗義 高瀬舟 仙 三百円 送 七十円

# 愛染帖

## 橘高薫風選

愛染帖いろはにはへどちりぬるを  
 桜貝オイルフェンスの海に哭く  
 八尾市 大略 美幸  
 みかん一個の重さで視界夕焼ける  
 笑わない男がくじの列に居た  
 倉敷市 藤川 良子  
 雪のさくらかの子のさくらより烈し  
 如月の火を噴く汽車が見たくなる  
 倉敷市 水粉 千翁  
 雲白く湧く恩讐の坂を越え  
 仏像のまろきを鑿の跡けわし  
 岡山市 行本みなみ  
 面の割れ目から白い煙が立ちのぼる  
 高い木から落ちておんながすぐ笑う  
 青森市 工藤 甲吉  
 満月の顔亡母となり亡妻となり  
 雪の中に埋もれた家人黙す  
 豊中市 高橋 古啓  
 その傷を待ってたようにふき出す血  
 階段を下りて下りても逢いに行く

書人展目の有る無しに眩むなり  
 破れ傘の骨拾う手に老い迫る  
 岡山市 船越 洋之  
 春らしくあればあるほどの悲し  
 食事終え見合いの男嫌になる  
 八尾市 香川 酔々  
 道化師が歩く霜焼けかゆくなる  
 どさくさの果て煎煮をものにする  
 島根県 河村 日満  
 働くにしかず距離おく宝くじ  
 落日へ中味とばしき市場籠  
 神戸市 小浜 牧人  
 一匹が群を離れて寒くいる  
 善人の嘘いつまでも胃に残り  
 堺市 高橋千万子  
 女から女が見えて身がちぢむ  
 嫌い嫌いとい介抱のかいがい  
 島根県 小砂 白汀  
 金色に塗るには金より外になし  
 中年が執拗く愛すシクラメン  
 竹原市 三宅 不朽  
 雲いろいろわが身の上をきくごとし  
 悔い多き不惑へ雪の降り止まず  
 京都市 松川 杜的  
 綾取りの流れ童話のリズム持つ  
 還暦へともかく眼なしダルマ買う  
 柏原市 大峠 可動  
 風一過胸に激しい火をくくれる  
 躓けば火柱となる十七字  
 岡山県 出原 敬一  
 小池 鯉生  
 身投げし湯女の古地蔵の肌衰えず  
 神垣は恐れ多しか葛かずら  
 高槻市 若柳 潮花  
 春の雨難波に近い御堂筋  
 初釜の帯を姉妹して結び  
 香川県 三井 酔夢  
 象頭山照る日曇る日母在わす  
 望郷の裏参道も知りつくし  
 岡山市 川端 柳子  
 疑ったわたしの悔いが虹となり  
 秘めことがちくちく久しぶりの客  
 豊中市 安藤寿美子  
 寒夕焼西方浄土も寒かるか  
 バレンタインやねえと娘にいうてみる  
 神戸市 来住タカ子  
 山河雨ゆ絵皿に燃える彩をとく  
 防風林旅の夫待つ機音  
 八尾市 高橋 夕花  
 吹雪く夜は白き祈りの声がする  
 ガーベラの細き乱れ友は寡婦  
 今治市 月原 宵明  
 人間の虚勢を喰う雪白し  
 この嘘はついこの間ついた嘘  
 松原市 谷垣 史好  
 痰壺の白さそこだけ冬の色  
 酒愉しここにも朱実という女  
 富田林市 板尾 岳人  
 鯛釣った話を聞きに来るおんな  
 酔さめの水に男はだまされる  
 大阪市 阪上十止庵  
 ちらつかす餌には野良犬よりつかぬ

野良犬の身に寒かるが暑かるが

守口市

野呂 右近

呉市

榎田 英詩

西宮市

藤村 メ女

夜を走る車のひびき孤独なり  
泣き濡れた人に冷たいマイクの銀

今治市

古野 伶人

岡山県

渡辺 晩童

大阪府

宮尾 あいき

結局は利のある方へこじつける  
あんま機がゴツンと貝殻骨へ来る

新宮市

大矢 十郎

東大阪府

竹中 綾女

岡山県

竹内 翁童

絵はがきの余りは妻へ旅だより  
少年期終れば他人の飯が待ち

三重県

川上 大輪

八尾市

高杉 鬼遊

岡山県

永宗 宗義

原色の女でふる里など持たぬ  
ささやきのこぼれを風に盗まれる

大阪府

堀江 正朗

大阪府

江城 修史

今治市

伊藤 一郎

妻呼べばこだまくるくる春の山  
停電へ電気電気の室凍る

島根県

堀江 正朗

堺市

山本 素郎

今治市

原田 一風

夢を盛る皿の浅さがふとわびし  
私だけのひとでありたい尾灯消ゆ

大阪府

稲本 凡子

和歌山県

沢山 福水

今治市

真山 国彦

慈善ショウ善意の片鱗など見せず

倉吉市

奥谷 弘朗

今治市

今井 松花

堺市

河内 天笑

陸橋が無用の長物となり冬

倉吉市

渡辺 善句

高知市

古谷 恭一

伊丹市

小川 静観堂

ノック待つ心へ雪は積みかさむ

島根県

榎原 秀子

八尾市

宮西 弥生

伊丹市

小川 静観堂

新居の香清い空気に馴れぬ風邪

八戸市

小泉 紫峰

大阪府

今西 章雅

伊丹市

小川 静観堂

虹なんか見た事もない正義派で

富田林市

岩田 美代

岡山県

白岩 文衛

伊丹市

小川 静観堂

丸木橋渡って流転買いに行く

大阪府

西出 一栄

大阪市

小谷 葉子

伊丹市

小川 静観堂

裏に籠る眉薄くして貞女たり

愛媛県

喜比のつづくは寄せる汐に似て

岡山県

池田 古心

大阪府

宮尾 あいき

素面で自民酔えば共産凡の愚痴

東大阪府

私だけの夫で欠点眼をつぶる

八尾市

高杉 鬼遊

岡山県

永宗 宗義

樞かつぐ罪の数かず帳消しに

大阪府

二ヶ月の風は夢をば囁かす

大阪府

江城 修史

今治市

伊藤 一郎

伎芸天ふくいくと頭かしげられ

堺市

男が去んで女が去んで星が降る

和歌山県

山本 素郎

今治市

真山 国彦

天譴のここに極まる瀬戸の海

今治市

うかうかとフレンドと云う仲にされ

高知市

古谷 恭一

伊丹市

小川 静観堂

身悶えの花びらひとつ墜ちてゆく

八尾市

武器みんな使った女の白い指

大阪府

金井 文秋

伊丹市

小川 静観堂

妻にまで及ばぬ週休二日制

大阪府

宝石の冷たさ女性の或る一面

岡山県

白岩 文衛

伊丹市

小川 静観堂

機関紙とボルノの他は読まぬのか

大阪市

小谷 葉子

伊丹市

小川 静観堂

いつもあなたが居てくれる胸のバラ

西宮市

ポスターへ佇つ故郷の花便り

大阪府

宮尾 あいき

岡山県

竹内 翁童

寒バラのピンク心へ浸み通り

岡山県

着実に一日終えた日記書く

岡山県

還暦へあと一足の重いこと

岡山県

永宗 宗義

春うれし恐し退院期待され

島根県

灰になるだけなら墓もいるまいに

今治市

御近所といえど値段は負けませぬ

今治市

原田 一風

土産屋へ着くとガイドは腰を掛け

羽曳野市

背かれた心の傷へ椿落つ

堺市

中年の嘘は円錐から射たれ

伊丹市

小川 静観堂

愛染帖心にかかる愛のこと

伊丹市

選者のことばー愛染とは、物に心がしみて

伊丹市

巻頭の句は、川上三太郎の句、

伊丹市

小川 静観堂

孤独地蔵花ちりぬるを手に受けず

伊丹市

挨拶句として、作者の私の思いやりの深さを

伊丹市

二十名以上の

伊丹市

小川 静観堂

全没者を出したが厳選の方針は変えないつ

伊丹市

よりである。(締切毎月15日・投句は拙宅へ)

伊丹市

小川 静観堂

伊丹市

小川 静観堂



## 老いの坂

若本多久志

(昭和四十二年七月九日発行)

わが道を行く気になって古稀近し  
袈裟ころも脱げば毛脛の凡夫なり  
もう叱ってくれる人なき地位寂し  
ふと気付く重役タイプへ自己嫌悪  
霊柩車俺が乗るのもあれかいな  
社員への訓示自分にも言い聞かせ  
解雇する稟議へ重い判を押し  
うっかりと上役らしい声になり  
人間と人間労使に席を分け  
苦節十年実印のふちも欠け  
倅はよい部下をもつ廻り椅子  
生き抜いてぬいて母の手荒れ給い  
そらごとの世に真実は母一人  
母の日のなかった頃に母は近き  
淡々として老妻の酌を受け  
茶をいれて何か言い度い妻の顔  
背の丸みわが愛妻も老いにける

死んだ子の面影ふつと秋の風  
出来ぬ子へ机の位置を変えてやり  
苦勞せいと言うては見たが親心  
うちの娘をやるに虚礼と言うとれず  
この荷飾へ父の汗母の愛  
女五十ハンドバッグがまだ欲しく  
名を問えば幸子と言いぬ湯女悲し  
倅せを信じて茲に女生き  
請求書飲んだ覚えは二三本  
お流れを頂戴に出る自己嫌悪  
牧水でなくとも泌みる秋の酒  
クラスメート訪えば秘書課で待たされる  
しきたりの通りに友も骨となり  
ご批判を乞う作品に自信あり  
名句ですねえと理解はしておらず  
これが人生だ酔うて寝る  
砂時計のように終って年の暮



## 砂の足跡

本田恵二朗

(昭和四十三年十一月三日発行)

胸を張れ胸を張ろうと独り言  
真すぐに生きて苦杯をなめ続け  
影二つ水かげろうにして流し  
洗濯機親子五人がからみあい  
鉢巻のそれほど能率あげていず  
養老院ちびた命をかばいあい  
水盤に浮ぶ人あり花鉢  
反対のための反対種が切れ  
ドラの音が涙袋に突き刺り  
目も口も鼻も笑うて久し振り  
噂する笑いは首をすくめあい  
雑沓でおやまああを拾い当て  
お人柄とぼけた味も持ちあわせ  
老僧の日課がボーンと丘を越え  
多島美へおまけのように真帆片帆  
月並なあいそも温し里の道  
雨洩りのにくたらしくもリズムカル

口への字ふの字に力む指角力  
欲捨てるときに開いた視野である  
はやり風引く順番が今日当り  
なんとなく出来たルールで平和です  
じよろの水双葉双葉へ話しかけ  
雨蛙坐禅の型で濡れている  
夏草の寄合世帯という姿  
踊りの輪漫画めくのがいてはずみ  
胎の児へほらほらごらん遠花火  
啞蟬の一と枝飛んで考える  
荒城は語らず虫に語らせる  
秋風を招き疲れてすすき枯れ  
野菊だけ摘み残しゆく墓掃除  
枕元しつけのよさを折りたたみ  
ボクがこけたらママの視線もこけた  
地にかえるうれしさを舞うばたん雪  
石像のほほ笑み静かな夜にする



水  
鶏  
笛  
  
西  
尾  
葉

(昭和四十五年七月七日發行)

張り替えた障子の中に母います  
阿呆になつときなはれという母があり  
手提袋持たす寝棺に又哭きぬ  
ネクタイをしめしめ喧嘩のつづきする  
迎え傘の妻に教える水溜り  
意見する儂がまだまだ遊びたし  
繰短の工場の上の揚雲雀  
菜の花の中の工場は閉めてあり  
鰹節水晶の型にかかれたり  
挨拶のものをもらつた声となり  
ラッシュ嬉しまさに唇ふれんとす  
差し押さえる金庫の上の鏡餅  
旅や旅情緒というのを見のがさず  
イメージの踊り子も見ず伊豆の秋  
盃に島の唄ありひとり旅  
宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来  
日本ライン盃洗にして酌み交わし

一步出ずれば吾れ旅人となる心  
旅枕雨にしあれば雨の詩  
温泉や座り羅漢に寝る羅漢  
お互いに中毒ですなと酌ぎこぼし  
芸者の耳うち高いものにつき  
義理がたい人に元日起される  
路郎忌や美濃の大八備後の亜鈍  
持って死ねなんだらしい銀行から櫛  
万引の哀れ子供のもの許り  
あの晩の風邪よと女嬉しそう  
オーロラに煉瓦の街は哀しかり  
最後の最後の味方は妻なりき  
倅ですともといじらしいことを云う  
牛の瞳に人間何をあわてとる  
眞や眞や汝を如何せん四十八  
社長今は孤独の二字をかみしめる  
税務署と言えばシャックリとまったり



# ねっくれす

西 出 一 栄

(昭和四十六年十月十日発行)

添わしても根締めの花はあっち向き  
忘却があり金婚にたどりつく  
あきらめて二号に介抱させてやり  
厄介なことに 年子になりそうな  
子らの眼にエプロンの母 母らしく  
真ん中に坐わり相槌いそがしく  
着ぶくれて文楽人形思わせる  
カーテンのレールも春のリズミカル  
胡瓜 茄子 どっさり漬けて心満つ  
菊の葉の天ふら秋を召し上れ  
不養生あとの始末は医者まかせ  
あれやがな なまえなかな口に出ず  
ふだん着のままで上座が板につき  
留守頼む隣りに今日は先越され  
面あてに飲んで帰れば妻は留守  
宿の下駄ゆるい鼻緒のまま出掛け  
たまさかの温泉 湯疲れして帰り

おんぶした子が傘の柄を持ちたがり  
来客へギョーザのように子がならび  
風の子の群れに見つけたうちの孫  
やわらかな陽射しへおしめ解いてやり  
寝転んでボソボソ話す里帰り  
マンションの小鳥になつてミンク着る  
空巢から見ればまじないのような鍵  
欠点だらけのように折れて嫁の親  
月・花・虫・野仏うれし秋の夜  
茄子畑かぼちゃの蔓に割り込まれ  
姑の早起き 嫁の里へ知れ  
鉄骨の火花散らしてつなされる  
低きにつく水はまことの心行く  
灰皿へ蓋がほしいな扇風機  
手土産と思えば先夜貸した下駄  
糸こんにやくふるえて袋につめられる  
生け花の根締めにも似た一生か



## 手書き句集

戸田古方

(昭和四十七年五月一日発行)

青空の底の知れないのが怖し  
親切に見える親切より出来ず  
ふんまえた石が動いたあわてよう  
ついてくる影であるのに追いまわし  
スリの欲とかわらん欲をもちながら  
晴れてほしいので晴れることに決め  
石鱗の角がだんだんとれてくる  
くたばれといわれる間生きている  
けなしてもけなしても自分がまだいる  
ほんとうの批評を夫は淋しがり  
未来がこわいのに孫が出来子が育ち  
世話ずきの師走ドブ板ふみはずし  
親戚は足音のする焼香し  
やーい科学にブレーキかけてんか  
ヘッドライトこの蛾は私かも知れず  
晴着きて医者にはらわたさぐられる  
赤インクは赤色青インクは青色

低いところあるのか水のおちつかず  
廻れ右すると左が右になり  
風車素直な廻りようをする  
大波小波小波の中にまた小波  
一粒をおしいただくも美容食  
谷あり丘あり私の皺のたのもしく  
ひっこめたらこんな足並みよう揃い  
右もいけない左もいけない真中もいけない  
一期一会くもればくもり楽しまん  
おごつてみたいまだそんなこと考えて  
石だけやないかに竜安寺あきれ  
逆わず旅を素直に切り上げる  
大地ゲラゲラ造成地クツクツク  
日が暮れたらねるんだったね老子さま  
今の音あれはわたしのお賽銭  
一休も裸でくると断られ  
定期券会釈をすれば会釈する



肉

眼

橘 高 薫 風

(昭和四十八年十一月三日発行)

恩師の死 その夜眠むしとも眠むし  
長靴の片方どうしてもこける  
福寿草 父子兄弟に似たりけり  
われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳  
草の芽が出たぞ おしっこさせながら  
蓮の花は一茎一花 恩師の忌  
一日の重さ軽さよ 日記帖  
夏雲の 死ねば越ゆべき峰ならん  
明治村 醉生夢死の昼の月  
汝が祈りふかからしむと雪を給う  
石くれも三つ積んだら思惟の塔  
てんと虫 ここにも小さい輪島塗  
暮れ切らぬ花火 心があとさきで  
漆黒のピアノから出る海の音  
秋風に傷なきものはなかりけり  
牡丹雪 ゆっくり俺が昇天す  
讃岐富士 一番星を簪に

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑  
一方になびけば恋慕薄とぞ  
菊花展 天守へやさし菊の塀  
手術なお神の議りに似し医師ら  
胃半分 肺半分の湯呑かな  
風花す 雪子が髪を梳くらしく  
長男の頭へ手を載せやすき背丈  
路郎の忌 天牛に來て落着きぬ  
默契や 野に紫の花が増え  
秋が來て笛は太鼓を恋しがる  
憂国忌 柿は蒂のみ残りたり  
白蝶入り 黄蝶出て來ぬ 寺の門  
手に足に関節のある寒さかな  
恋人がいま肉眼に入り来る  
裏切られあたたかきもの放尿す  
安からめ 御身の胎児たり得れば  
睡蓮は万丈光の光源よ



## 高瀬舟

永宗 宗義

(昭和四十九年十一月十二日発行)

蜜蜂の重みへれんげじつと耐え  
花活けた目そのままに正座する  
シナリオのとおり秋風吹いて来ず  
水溜り月をまたいで行く夜道  
あの雲が雲がと交わす月見酒  
青空に消える外ないちぎれ雲  
だまされて梅 温室ではころびる  
寒月をのぞいて戸締り確かめる  
へそくりがけしかけて居る春がすみ  
折れそうな弓に頑固な矢をつがえ  
日溜りで憶面もなく色ざんげ  
落ち着いて見れば私の影だった  
ワntenポおくれて私の唄があり  
銀婚の旅を娘が指図する  
振り返る過去美しい曲り角  
句読点ないまま過ぎた五十年  
軸を変え花も活けたが誰も来ず

風の音なのに老人腹を立て  
表情が変わったとこで母が折れ  
あの人に向く香水をつけて逢い  
何も彼も許してあなたと云えぬ人  
貸衣裳だったとあとで笑い合い  
やけ酒とわかつて女将飲まさない  
ホステスに呉れてしまった夜を悔み  
よくよくのことか看護婦腹を立て  
ドック入り医者に古傷掘り出され  
病人の躁り言 元気なら元気なら  
介抱をいたわる寝息わざと立て  
注射の名次々おぼえて病み続け  
目覚しをかけて別居の夜を耐える  
横に向く自由を釘が持っていた  
王手飛車助言したのはもう居らず  
私のものです しかも腕を組み  
すき焼きで良かった一人ふえ二人ふえ



聴  
診  
器

北川 春 巢

(昭和四十九年十二月十日発行)

病名は知らずなと医者小さい声  
信頼をしてる先生切れという  
我慢よすぎて盲腸を悪化させ  
笑い上戸そろそろ笑いはじめたり  
嘘多き世へ朝朝のひげを剃り  
理想には遠い日日なり日記書く  
紹介の名刺の判は息で捺し  
定退後急行通過の駅でよし  
麻酔さめかけて夢にも色があり  
着脹れて着脹れて試歩の足重し  
朝っぱらから笑い上戸の三ヶ日  
風上げの根気学習にも欲しく  
無理をした中元軽るうおきめられ  
若い人もいるいる彼岸の天王寺  
亀の池先祖代々ですましとき  
南座の外は浮世の雨が降り  
すき焼の豆腐はみんな祖父へゆき

大学を出たらエレキも卒業し  
ふるさとの道の狭さも古きなり  
帰郷して都会の無名性を恋い  
お醤油の汚点口紅の口で吸い  
バイコロジ朝は駅まで妻を載せ  
アルバイトも恋も恩師の世話になり  
誘蛾灯のようにネオンが光りだし  
諦めたバスに途中で追い越され  
ムード盛り上ったに歯が痛みだし  
乗り切った危機大ジョッキ軽うあき  
雑魚は雑魚なりのルートがあつて飲み  
いくばくの余生か飲めるだけ飲む  
不景気とやらではかどる道普請  
人柄をほめず家柄ばかりほめ  
良心のカケラボロ儲けを逃し  
大安の大事故やはり迷信や  
欲のない顔をしている恐ろしさ

大萬川柳の名花二輪・右は夢園花椿さん、  
左は宮西弥生さん。後向きは右から河戸天  
笑氏、橋高薫風氏の選句風景。



## 春よぶ

### 第22回大萬川柳大会

日時 50年2月16日1時  
会場 割烹 大萬 3F

の愛情が一本の柱に、壁に廊下にかがやいて  
いるようである。

司会

西尾 栗

開会の辞

若本多久志  
中島生々庵

柳話

藤岡 花梢選  
阪上十止庵選

昭和四十九年度ベストテン表彰

河内 天笑選  
宮西 弥生選

兼 題「指」

橋高 薫風選  
(松下梁水氏欠席)

「手頃」

本多 柳志選

「先手」

金井 文秋選

「愛人」

菊沢 小松園

「根性」

本多 柳志選

席 題「ことずけ」

金井 文秋選

「どさくさ」

菊沢 小松園

新幹線が積雪で二時間余遅れ、昨夜は阪神  
ハイウェイも一時閉鎖という寒波の襲来だっ  
たが、きょうは快晴にめぐまれ、やっぱり大  
萬川柳大会から、春が来るんだな、と句箋に  
4Bが躍る。

閉会の辞  
これが49年度の大萬川柳が演出した川柳ド  
ラマのプログラムだ。  
司会ならこの人、西尾栗氏のポリュームあ  
る声量は今日も快調である。  
開会の辞ならこの人、若本多久志氏はまず  
黙祷からはいり故梅里氏の遺徳と令兄川村好

郎氏による大萬川柳の発展を心から祝って激  
励のことばとされた。謝辞は松江克美氏。早  
く川柳が上手になって二代目梅里を襲名した  
い——ここで期せずして拍手が起る。なか  
な道遠しの意を表されたが、今日の割烹大  
萬の発展ぶりには初代も舌を巻いておられる  
ことであろう。

中島生々庵主幹の柳話は、司会栗氏が述懐  
されたように近來の傑作であった。ご生国の  
佐賀鍋島藩の藩士の教育の書としてあまりに  
も有名な鍋島論語「葉隠れ」をわかりやすく  
解説された。「武士道とは死ぬことと見つけ  
たり」にはじまり、下の位、中の位、上の  
位、上々の位のはなしは川柳人にびったりの  
内容である。下の位ではいくら勉強しても上  
手になれない川柳……上々の位では、すべて  
のものを自分の川柳にする……と記者は解し  
たが、実に有益な柳話だった。

主幹の柳話が拍手のうちにおわったところ  
でベスト10の表彰となる。ここで選者好郎氏  
は上位三氏（花梢・十止庵・天笑三氏）にト  
ロフィーを贈られたが、その理由は、三氏の

後半は抜きつ抜かれつの大接戦で、最終月には三者が一点差で決着をつけたという、その死闘にも似た柳戦に十止庵、天笑両氏に準梅里賞を。また僅少の差でベスト10入りがならなかったつき子、柳宏子両氏には敢闘賞を贈ったいきさつを報告された。

大萬川柳に曙けた花梢川柳が今年もまた首位の座を守ったのは女の執念だ。(柳志氏談) 朝二氏(岡山) 酔夢さん(香川) はか遠來の方々を拍手で紹介。

さて、閉会の辞ならこの人、菊沢小松園氏が演壇に立たれると、舞台上に拍手の幕がおりる。

大萬川柳大会の特徴は笑いで始まり笑いで終る。これが大萬フアミリーの川柳愛である。

## 第二部 演芸大会

当主克美氏が、ご自慢の幕の内弁当に、大萬すしもうんとたべてくださいと挨拶され、ビールと清酒がドンドン卓上に届けられた。

演芸大会はこれも大萬川柳の名物になっているが、この司会が名物男柳宏子氏の独壇上でもある。まずは村田瓢太氏の奇術から幕が開く。これはご存じプロの領域だ。(松竹芸能ゼンジ) 中村氏の秘蔵弟子) アダチ竜光氏が天覧奇術で見せたものと同じものを大萬演芸場で披露された。

三味は町子姐さん、踊りは菊子姐さんと毎年同じきれいだころが座を引きかたてる。

まず素郎氏がハンドマイク片手に洪い、

「傘」を聞かせ、酔々、美幸、太茂津、マサ子、福水、薫風、静馬、榮、柳志諸氏はか、天笑氏のギターに、町子姐さんの三味の音にのって小唄、端唄、流行歌と花やかだ。

この日の庄巻は香川の三井酔夢さんが踊る「梅は咲いたか」で、唄が素郎氏の特別出演となる。さすが名取りの手さばき足さばきである。菊子姐さんがその前に「吉三節分」を踊って、今年ば春から縁起がいいわい」と大萬川柳への心づくしもうれしかった。

飲むほどこに歌うほどこに会場はクライマックスになるが、記者のほうがあるところにはグロッキーになり、宴なかばで退場は毎年のことながら申しわけない。

(ペン・不二田一三夫)  
(カメラ・板尾 岳人)

### 第二十二回 大萬川柳大会

(三才と軸のみ)

兼題「指」 藤岡 花柳選  
人 点字追う指はあしたを疑わず 天笑  
地 指躍る今日北浜も寒い風 小路  
天 肩をもむ指にさわった父の歳 雀踊子  
軸 指折れば私の過去が笑い出す  
兼題「手頃」 阪上十止庵選  
人 足して二で割って手頃な額になり 柳志  
地 手頃などこの値札が丁度裏返り 小松園  
天 お手頃な値段と馬鹿にされている 千寿子  
軸 手頃手頃で娘三十すぎている  
兼題「先手」 河内 天笑選

人 コンピューター無視した先手物を云い 形水

地 バレンタインに先手を打った友がいて 酔夢

天 先手打つ距離をはかっている煙草 雀踊子

軸 浮気まで妻に先手打たれたり 兼題「愛人」 宮西 弥生選

人 愛人の微笑にブレキからかない 静馬

地 地の底で愛人と住む城きずく 一三夫

天 堂々と今日愛人として喪服 小路

軸 愛人の鼓動青い炎にて 兼題「根性」 橘高 薫風選

人 根性を変えたと友がいなくなる 十止庵

地 根性で勝ったが医者世話になり 百酒

天 したたかな根性笑みを絶やさない 翁童

軸 天の邪鬼の貌は根性かも知れぬ 兼題「ことづけ」 本多 柳志選

人 珍客にされてことづけ言いそびれ 吸江

地 奥さんが居てことづけ云いそびれ 朝二

天 梅に來いことづけだけは如才なし 太茂津

軸 南極のたよりはハムがこさずかり 兼題「どさくさ」 金井 文秋選

人 どさくさに一言開きすてならぬこと 鬼遊

地 どさくさがおさまり肩が凝ってくる つき子

天 どさくさに記者の鉛筆もう動き 美幸

軸 どさくさをチャンスに甘い汁を吸う

# P T A

## 小出智子選

親元へ一人預けてPTA 右近  
 新設の校舎PTAの智恵を借り 正彰  
 母さんの郵便ふえたPTA 弘生  
 PTAうっかりしてた子の非行 本蔭棒  
 越境のPTAの顔が利き 無人  
 尻に敷く癖を小出しにPTA 紘二  
 先生の進退握るPTA 肖二  
 議題より指輪が気になるPTA 寿美子  
 PTA会合何時もの顔がより 度  
 正論へ一座がこまるPTA 寿美子  
 参観日子に似た顔顔並んでる 静泉  
 普段着の約束守れぬPTA 綾女  
 酒になる迄の父親かしこまり 不二  
 PTAとして母校へ恩返す 白水  
 PTA発言きまつた人ばかり 落猿  
 PTA教育ママを張切らせ 代仕男  
 PTA似てない親を不思議がり 豊生  
 洋服が着物か迷うPTA 思月  
 PTA遊ぶことなら馬が合い 福水  
 宴会にPTAの勢揃い 伊津志  
 PTA寄付の話へ集らず 道子

校長もPTAへ低姿勢 芳仙  
 PTAマダムは地味にして出掛け メ女  
 PTAママも今日から一年生 夕花  
 PTA子を入質に出したよう バット  
 PTAも応援に来る野球熱 金三  
 役員に教育ママも入れておき 亭  
 二次会が楽しみも来るPTA 伶人  
 成績が落ちPTA敬遠す 素身郎  
 PTA弁のたつのに役をつけ 福水  
 六三制子は塾ママはPTA 竹馬  
 肩書に物を言わせるPTA 利美  
 出来る子でPTAに顔を出し 無人  
 PTA発言したら役が付き 右近  
 進学へママも社交の場をひろげ 静枝  
 PTA今日は元気な手があがり 重人  
 PTA校区の地図を塗り替える 悠泉  
 妻きょうもPTAで家を空け 洋々  
 休暇とる程でなかったPTA 木魚  
 PTAここでも金が物を言い 藤持  
 井戸端の代りにもなるPTA 国彦  
 教育ママPTAをかきまわし 不二  
 PTA家の簾は棚に上げ どんたく  
 PTAまたまた金の要る話 露子  
 PTA子どもに済まぬ共稼ぎ 豊生  
 鋤鋤を洗うて午後はPTA 本蔭棒  
 エプロンでPTAの隅におり 夕花

## 甘茶

### 久家代仕男選

一べんであはらしなつたPTA 寿美子  
 PTA教師の恋にも口を出し 茶人  
 PTAの動き選挙がもう近い 素身郎  
 天  
 釈迦如来甘茶の洗礼に耐え給い 思月  
 白象と甘茶にぎわう お釈迦の日 祥月  
 灌仏会 甘茶で洗う煩惱魔 竹馬  
 病妻の好きな甘茶を吹いてやり 保夫  
 リズム感狂わす甘茶飲まされて 古心  
 抱き上げて甘茶を注ぐ孫の春 紫宏  
 団地では里の甘茶の話だけ 暁明  
 一人居の遅日に甘茶 届けられ 一風  
 働く手 甘茶の記憶 遠ざかり 重人  
 行き合せ 釈迦に甘茶の金閣寺 貞祐  
 清貧のおごりのような甘茶出る 昌道  
 薬効があると甘茶が見直され 綾女  
 ただだった甘茶も料金書き出され 章雅  
 独尊の指から甘茶はどばしる 本蔭棒  
 仕込まれた甘茶に酔がまわり過ぎ 木魚  
 甘茶よりコーラがうまい花御堂 芳仙

花祭り前夜 甘茶に蒸せる庫裡 香珠夫  
 明治生れの舌にはなつかしい甘茶 七面山  
 若者の舌に 甘茶は馴染まない 松花  
 故郷に甘茶の寺が まだ残り 弘朗  
 花まつり 甘茶に酔うた仏さま 英詩  
 釈迦いわく 世間の底の茶の甘さ 凡九郎  
 頭から甘茶 お釈迦も辛からう 静泉  
 名利の 鐘が終日鳴る 甘茶 宵月  
 泣きに來て寺の甘茶にいたわられ 翁童  
 車椅子 甘茶の寺へ母を連れ どんたく  
 線香と甘茶の湯気に 酔う人出 悠泉  
 尼寺で 今日甘茶の出る予告 福水  
 甘茶仏 小さな指で拜まれる 伶人  
 灌仏会 甘茶の杓のもつれ合い 芳仙  
 カッポレの甘茶を知らぬ節廻し 太茂津  
 住職の 甘茶の後の般若湯 春日  
 接待の甘茶柄杓が壺の底をつき 金三  
 奈良という記憶が舌にある甘茶 可住  
 里からの甘茶 夫の氣に入らず 不二  
 どの顔も悟る甘茶の列となり 千翁  
 甘茶杓 甘茶の彩に馴染みきり 白水  
 童心にかえる甘茶の順を待ち 曉風  
 麻痺の子へ母の願いの甘茶汲む 奇童  
 甘茶含む 天 地 人 みな善人の貌となる 肖二

歩 道

長野文庫選

緑ある歩道嬉しいランドセル  
 ダンプが来るぞ歩道に居ても氣を使い  
 歩道橋ビーポー今日もくぐり抜け  
 嬉しい日歩道に足音軽く鳴り  
 人生の歩道まっすぐ歩けない  
 梢から歩道並木に春が來て  
 歩道まで送ってママはママの道  
 蹴とばし度い車歩道へのし上り  
 どことなく片脚駐車犬に似る  
 歩道橋街の流れを少し変え  
 歩道橋が歩道にしようかと迷う老い  
 日本の歩道が沈む恐れ夢  
 人道の有難さ知る歩く会  
 明日も晴れ歩道も夕焼に染りそう  
 安全な歩道歩くも目を配り  
 貸しのある顔が歩道の向い側  
 酔っぱらいちゃんと歩道の上で寝る  
 ストの波のんびり見下す歩道橋  
 歩道橋ここの地蔵は人柱  
 商店街二月の歩道桜咲く  
 冬告げて歩道を駆けて行く落葉  
 右近 英詩 代仕男 洛 醉 与史 太茂津 奇童 昌道 寿美子 洋々 綾女 金三 伊津志 曉明 正則 バット バット 登美也 悠泉 宵明 七面山

名ばかりの歩道白線引いただけ 香珠夫  
 蒲焼の煙歩道へ煽り出し 本蔭棒  
 歩道行く二人に甘い春の風 春日  
 歩道行く向いの人の遠会釈 貞祐  
 ストの列歩道一ぱいのし歩き 曉風  
 じゃま者にされ人間は歩道橋 利美  
 病後の身には疎ましい歩道橋 素身郎  
 はきだめのような歩道へ落葉舞い 陽子  
 旅たのし見知らぬ町の歩道行く 豊生  
 バージェンの品歩道まで溢れ出る 紫宏  
 わが道へ安全歩道つけて欲し 静泉  
 歩道から見ればせわしい車道で 重人  
 お向いに行くにも遠い歩道橋 福水  
 自然歩道素足大地の味さぐり 翁童  
 バージェンの目玉歩道にはみ出てる 露子  
 生活を踏んで歩道に靴がちび 千翁  
 歩道橋しはしとれるカラッシュ 利美  
 老人をいたわるはずの歩道橋 無人  
 次々に來ては歩道を掘り返えし 国彦  
 歩道まで八百屋じりり店を出し 木魚  
 歩道橋事故が続いてやっと出来 陽山  
 街路樹の歩道を恋の道とする どんたく  
 軸 天 地 人 抜ち打ちがもれ片付けて待つ歩道

# 初歩教室

題「足」

本田恵二朗

川柳という川は広々として青く澄んでいる。義理人情や浮世の美醜を大らかに呑み込んで笑みをたたえている。そこで泳いでいる人達は、職業も年齢も性別も超越して、澆刺と楽しそうである。まことに佳き眺めである。平泳ぎで淡々と泳ぎ続けている人の姿は落着きと安定感がある。さても忙しうにクロールではあせているのでもない。それも面白いが中にはあせているのではなからうかと思えるものもある。ひどいのは気が狂ったみたい支離滅裂な泳ぎ方で得意がってみたり、反骨精神的な泳ぎ方で虚勢を張るものもある。はては岩壁に衝突して自爆したのもいる。いつとはなく静寂な心境を取戻して、まことに好ましい泳法を発見しているものもある。そして川柳の流れは淡々として流れ続けている。

足癖の悪いお人が先に履き

警二

句主は最初に座五を(替えて去に)としてみたが何かもの足りなくて考え込んだ。そこで発見したのが(先に履き)である。一応出

来たようだが、もう一歩踏み込んで考えてみようではないか。それは説明的な表現を川柳的な表現にしようとする努力である。

(そっかしに足にサンダル履き取られ)  
足を踏み踏まれて気立つ通勤車  
同

(わが足でわが足でなし通勤車)  
セールのコツを足から教えられ  
同

(セールのコツは足です足です)  
娘のしつけ襦袢を足で開けたる  
同

(現代っ娘襦袢を足で開けたる)  
見栄張ってみても足元見透かされ  
露杖

(見栄を張る男の足がふとよろけ)  
棧橋を往き交う足に春の風  
同

(棧橋の足音増して春霞む)  
春はのか土筆が足を呼び止める  
大成

(土筆さんコンニチワと足に言わせ)  
足早やに女が去れり伝言板  
同

(この二句中々佳し、この調子で精進あれ)  
北風が家路へ足なみ急かしてる  
静泉

(北風が家路の足をいそがせる)  
銭になる足型関取であればこそ  
同

(幕内になつて足型銭になり)  
揃つて足にも異議持つ心居る  
凡九郎

(四脚ともに揃つて心居る)  
足袋を脱ぐやっぱり私の家なんだ  
同

(わが家はいいなゆっくりと足袋を脱ぐ)  
ただ者に非ず男の白い足袋  
本蔭樺

(よい句材をとらえている。頑張れ)  
東大寺雲にそびえる足場組み  
貞祐

黄銅六角ボールナット  
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地  
TEL 06 3452104  
夜間 06 44008

(雲に——とオーバーな表現が句を生かした)  
あげ足を取って自慢の声となる

(あげ足を取って凱歌を挙げている)  
足しげく通うた成果がはくそ笑む

日曜日素足で歩く土の味  
退院の足踏みしめて踏みしめて

足を知ら日々好日と掌を合せ  
百足競争気のせく奴が一人居て

もう一度ミニの流行ほしい足  
働いた足が見えてるのれん酒

昇格の辞令へ足が踊りそう  
軍配が黒星つけた勇み足

(勇み足軍配の目に見逃がさず)  
お隣のお帰る軍歌で千鳥足

(巻舌の軍歌隣りのお帰るだ)  
春うらら足裏から陽を吸わせ

足が出る覚悟で世話役買うて出る  
紫 同 無 利 同 敏 同 瓢 同 翁 同 宗 義  
宏 人 美 太 童 義

# 阪合同吟行句会

5月1日大阪駅発―5月5日大阪着  
 ▼詳細は前月号48ページをご覧ください。  
 定員 二十四名 会費三万円  
 (申込所) 584 富田杯市北大伴二〇八  
 電07212 (4) 6525・板尾岳人宛。

借りのある店足早やに通り過ぎ  
 夜遊びの猫の足裏拭いてやり  
 (夜遊びの猫めに足を拭かされる)  
 初孫の足型手紙をよるこばせ  
 (初孫の足型添えたよい便り)  
 白浪けり船足早く新婚の旅  
 (ハネムーンを乗せて船足リズムミカル)  
 返事よく太い足した嫁が来た  
 (さわやかにハイと応える嫁の足)  
 歩こうと思う真顔の子の義足  
 (義足の子顔の汗をものとせず)  
 (義足の子顔の汗をものとせず)  
 足音を殺し病室不安満ち  
 (足音を殺して病間に寄る不安)  
 (病間の不安が足音を殺させる)  
 足音が情緒を残して消えてゆき  
 (足音が甘い情緒を置いて消え)  
 世の中に怖いものなし千鳥足  
 (矢も鉄砲も来いとはかりの千鳥足)  
 気だけは若くても足から年をとり  
 (若い気の散歩を足に喰われる)  
 (若い気の万歩時計を喰う足)  
 足音が揃えば犬がついて来る

同 静 枝  
 同 日日子  
 同 サ ヨ  
 同 陽 山  
 同 慶 彦  
 同 頼 次  
 伊津志

(中々愉快な句が生れた。精進あれ)  
 通勤の駅へマイペースの歩巾  
 (通勤の足マイペースをくずさない)  
 この足で最後は犯人探し当て  
 (とどのつまりは足で犯人探し当て)  
 (ホシを追う足の根気が追いつめる)  
 犬に似た仕種でバツター足場決め  
 (面白い見かたをやったな)  
 母さんへ足を伸した子の寝息  
 (丸山弓削平さんの句に次のものがある。)  
 (上の子は足だけ母に触れて寝る)  
 (明治から鍛えた足が車酔い  
 両足を前後左右に美容体操  
 (美容体操両足あられもなく上げる)  
 ブランコの児の足ひやり冬の風  
 (ブランコの児の足冬の風を蹴る)  
 茶の間をこれはご免と足で開け  
 (足で戸を開けて悪友ヌッと来る)  
 聞き込みの足どこまでもどこまでも  
 一票が伸びる足が軽くなる  
 (票が伸びる伸びる足が軽くなる)  
 長年の足で稼いで来た知識  
 (幾歳月足で集めた知識です)  
 パンタロン春の足音キャッチする  
 (パンタロン春の足音へ歩を合わせ)  
 子のためにつけた足跡へ歩は踏まず  
 黙々と足が折つてる百度石  
 (百度石折りのこもる足の音)  
 足足足都大路は足ばかり  
 (足足足都大路は春の音)

三十四  
 同  
 幸 生  
 敏  
 静 子  
 静 堂  
 同  
 藤 持  
 重 人  
 同  
 保 夫  
 茂 美  
 同 道 子  
 同 子  
 同 子  
 同 子

春寒に日足の伸びて梅かおる  
 (梅一輪日足そろそろ伸びはじめ)  
 足跡をとどめおきたる日のあせり  
 老醜は足の爪にも見せはじめ  
 (足の爪ここにも老いの色しみる)  
 踏みそうなスカート足が見当らず  
 寺の坂まだだ老母の足たしか  
 飲み仲間互をあてに足を出し  
 デパートは見るとこ足の疲れどこ  
 ミス〇〇正座出来ない足をもち  
 春夏秋冬不足だらだあきもせず  
 いち早くロングをはいた大根足  
 老い知らぬ足二三里はなんのその  
 題一言四月二十日締切(六月号発表)  
 宛先 倉敷市下津井一―九一三四七二一  
 本 田 憲 二 朗



プラス

高級洋菓子・レストラン

本店 洋菓子部 TEL (33) 9974  
 レストラン TEL (21) 2334

同 正 則  
 同 繁 子  
 同 駒 子  
 同 つ ね  
 同 ます 子  
 同 喜 子  
 同 濁 子  
 同 秀 子  
 同 村 子

大萬川柳

「壁」 入選発表

激情が醒めたる壁の冷たさよ

大阪 君子

手を抜いた壁に干割れが見えはじ

大阪 金三

身を粉の介抱義理の壁を消し

堺 ひろ子

自分との戦いという壁だった

大阪 文秋

煩悩を引っこめて壁乗り越える

天笑

三浪のねばりが厚い壁破る

大阪 清女

姑と呼ぶ人に作ってならぬ壁

倉敷 枝

再婚の壁の厚さをかみしめる

鳥取 静枝

何もかも知ってる壁が喋り出す

大阪 小松園

城壁にからむ鳥にもある歴史

藤井寺 吸江

崩れゆく土壁旧家という誇り

広島 とし

壁土が朽ち落ちたまま文化財

選者 川村好郎  
投句総数 六百六十五句  
入選 六十八句

守口笑風

受験子の悲願壁に張り出され

大田 軒太楼

石室の壁画飛鳥の美女残し

和泉 洛醉

スランプの壁に根性ためされる

大阪 一栄

はりぼての壁だが僕と君の城

兵庫 可住

らくがきのうまさ壁画として残り

豊原川 度

定年の壁は大きくのしかかり

倉吉 弘朗

持てあます孤独が壁に話しかけ

岡山 陽子

全没にめげず大萬の壁たたく

八戸 昭治

プレハブの壁は空虚な音がする

奈良 保夫

念願の家新壁の匂う幸

西宮 多久志

日ソの壁領土の返還まだ遠い

大阪 つね

記録への壁に根性叩きつけ

岡山 翁童

裏口という手を使う厚い壁

笠岡 忠三

建売りの良心壁に見せており

橋本 木魚

探求のまた突きあたる未知の壁

平田 代仕男

正論を吐いたばかりに壁が出来

鳥取 豊生

つき当る壁がでっかい三代目

松江 登美也

重文の壁汚しする愛の傘

大阪 貞祐

GNP資源の壁に突き当たり

大阪 章雅

つき当る壁へますます出るファイ

今治 有里

壁いっぱいヌードを貼ってまだ独

神戸 どんたく

人情を長屋の壁は阻まない

西宮 百酒

壁一重聞えますよと妻が折れ

尼崎 利美

見くびった壁にどつかと居直られ

米子 千代

限界の壁へ男を賭けています

大阪 好一

胸の壁叩けば愛がこだまする

大阪 好一

亀裂した夫婦へ壁が白すぎる

大阪 好一

その壁を破るチャンスに耐えてい

岩壁を登るザイルに血が通い

貝塚 つき子

貸し借りのもつれぬまじい壁つく

神戸 牧人

壁にベニヤ着せて改築あきらめる

大阪 あいき

鼠の恋貫徹させた壁の穴

大阪 あいき

その秘密見てみぬふりもしてる壁

富田 花梢

台所母の歴史の染みる壁

富田 花梢

壁一重連うドラマがある団地

富田 花梢

みんなの暮しが明るくなる  
セキスイのプラスチックス

積水化学

本社 大阪市北区茶屋町1



あなどった壁の厚さに悟らされ

倉敷 梁 水

嘘のない暮しで壁に耳がない

壁落ちたままの旧家が忘れられ

大阪 十止庵

はた目にも羨む義理の壁がない

療養の瞳に白壁も四季の色

寝屋川 小路

蹴破った自信の壁は厚くない

灰色の壁の向うに虹を見る

八尾 鬼 遊

病室のどう寝返ってみても壁

天守閣秘話塗り込んだ白い壁

今治 宵 明

日稼ぎへ不況の壁が厚すぎる

ボクシング見てる父子は壁がない

和歌山 佐知子

耐えしのお母あり壁にある亀裂

少年の志壁を突き破り

八尾 弥 生

友達でいる気ので壁厚し

佳 句

黒幕の正体見せぬ厚い壁

生きる知恵風雪耐える壁となる

壁に貼る禁煙だから守れない

お隣りもやりくりと知り壁が取れ

独房の壁真実の声を聞く

誘惑の前で良心壁になる

地ノ 句 大 阪 頂留子

マンネリの安易壁さえ見失ない

天ノ 句 平 田 代仕男

壁一つ越して先人の背が見え

選者 吟 兵 庫 可 住

面壁十年そんな根気は忘れられ

「扉」の入選句中「産院の扉を

父の顔で押す」は野坂つき子さん

の句でした。おわびして訂正しま

す。(好)

昭和五十年

ベストテン(二月現在)

一 可 住

二 一三三

三 つき子

四 好 一

五 翁 童

六 弥 生

七 あいき

八 静 泉

九 洋 々

一〇 十止庵

一一 花 梢

一二 柳 志

一三 代仕男

一四 多久志

面壁十年そんな根気は忘れられ

「扉」の入選句中「産院の扉を

父の顔で押す」は野坂つき子さん

の句でした。おわびして訂正しま

す。(好)

昭和五十年

ベストテン(二月現在)

一 可 住

二 一三三

三 つき子

四 好 一

五 翁 童

六 弥 生

七 あいき

八 静 泉

九 洋 々

一〇 十止庵

一一 花 梢

一二 柳 志

一三 代仕男

一四 多久志

一五 吸 江

一六 佐知子

一七 文 秋

一八 美 幸

一九 維久子

二〇 白 水

二一 宵 明

二二 白梅子

二三 小松園

二四 金 三

二五 久 子

昭和五十年度第五回

「裏」 五句以内

締切四月二十日

第六回

「花 瓶」 五句以内

締切 五月二十日

投句先

〒50 堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方 大萬川柳係

# 近

# 作

今治市 月 原 宵 明

東京都 池 口 呑 歩

対決をする朝靴の紐が切れ

金で買う恋が待ってる波止場の灯

船乗りの恋を喰うかとんびの輪

船乗りがستنテンで待つ船出

落丁を氏名詐称につかまされ

定期券脱兎のように往き帰り

爪塗ってマイナスとなるきれいな手

趣味の会老化わが家もまた老化

今治市 長 野 文 庫

長男の就職寡婦の歴史替え  
宝くじの列賢そうなのは居らず

# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼川柳研究社年度賞表彰第三回川柳大会は5月18日正午から中央区新富一六八の印刷会館で開催。第一部は出席者、第二部は投句者となっている。課題は「手紙・手当・手伝う・手帳・手拭・手腕(各3句)」。投句料五百円(発表誌七月号共)締切5月10日、投句所〒113東京都文京区根津一五十二吉岡宵波宛。▼川柳教室が四月から開講。講師は伊藤柳涯子氏と山路閑古氏。4月7日、16月30日(12回)朝日新聞の文化事業「朝日カルチャーセンター」〒160-9191新宿住友ビル内私書箱22号。▼対流(一行誌型研究)第三号が1月7日東京都豊島区北大塚一丁目三三四森林書房から発行(三百円、〒五五五)川柳の山村祐氏と俳句の津久井理一氏がガッチリ組んだ異色誌。評論・随筆が冴える。

▼第29回長野県川柳大会は5月4日10時から飯田市勤労者福祉センターで開催。題は「ドラマ・飯・道・移植・流出・任す・思惑・連絡先」〒395飯田市本町一丁目藤井写真館内飯田天柳社。▼第12回北海道川柳大会は6月22日11時から岩見沢市九条西四丁目市民会館で開催。各題二句詩で題は「白・顔・新しい・真ん中・特別課題「テレビ」投句締切4月20日(投句料三百円)」。このほか雑誌三・〒068岩見沢市七条西一丁目浜中道子(2)2752。岩見沢の芽川柳会。

▼川柳三重二月号は第12回三重川柳大会。山本峠、前田美巳代、中村土竜、岡崎徹平、橋本征一路五氏が上位入選している。▼伊達南谷子川柳句集「笙鳴」が仙台市東八番丁一七〇川柳宮城野社が発行。序両氏は高橋放浪氏、後藤園人の俳侶としてのおもかげが見える。美本。価一〇〇円。▼柿山被輝川柳作品第三集「独り者のたそがれ」が、熊本市新生一丁目四一八、川柳噴煙吟社から発行。タ

イトルが示めすように著者は独身者である。そこにキビキビした若さが躍動する。▼番傘川柳本社の事務所移転。〒530大阪市北区伊勢町11-1伊勢町ビル六〇五号。電話は在来どおり。▼岐阜川柳社は〒500岐阜市真砂町七丁目へ。▼川柳春秋は二一〇号をもって最終号とするが、惜しい柳誌がまた一つ消える。▼汐風川柳社(月原宵明会長)は5月17日10時から、愛媛川柳連盟川柳研究大会を開催。詳細は次号で。▼第11回大陸川人同窓会を6月7日開催(6日は前夜懇親会・8日は観光)岐阜神社朝座屋(重文建造物)宮島町宮旅館・宮島ロッジ。兼題は「平家物語」。「孫悟空」各2句。お問い合わせは〒670姫路市北条二五〇大井正夫宛。▼金子吞風氏(上田市)から雪だより130センチ以上は本年二回目の積雪でした。一冬を雪の下で有線放送の川柳を楽んでいる主婦や娘さんが半か年に二百名にもなるとのこと。▼木村喜見城氏(富山県川柳えんじ社会長)の句碑建立は本年四月のこと。

募金一口千円(三月末日まで)申込先は魚津市下村木町三九七五の一、魚津市立図書館内木村喜見城句碑建立委員会事務局。▼市川鱗魚氏(岐阜市)から昭和23年に発行された路郎先生の「新川柳講座」が当時の紙不足でザラ紙のため破損しやすき、なんとか再版できぬものか教材として最高のものだけに希望が多いこととおもう。▼藤村青一氏(寝屋川市・高鷲亜純)は2月7日付のアサヒフタミリ紙に紹介され、詩人として五十年、川柳を理解するようになって四十年のキャリアから「三井が丘川柳会」の誕生までを語られた。一団地から迫られて老犬どこへ行くー亜純。▼林蒼蛇樓氏(ハワイ)から「昨秋副知事になった土井ネルソン氏は四十数年前の私の教え児でした」と。▼白石朝太郎一周忌記念大会は6月1日10時から盛岡市岩手教育会館で開催。投句のみは受け付けぬとのこと。詳細は柳都川柳社へ。▼静岡川柳二月号は「櫻田竹林追悼号」で、その巻頭に「柳葉女未亡人」が「竹林と語る」を執筆。最大の無情夫を仏にしー柳葉女。▼今川椋彰氏(天洲市水郷川柳社会長)は一月二十六

## 食べすぎ・のみすぎに 新タケダ胃腸薬

効能—食べすぎ、のみすぎ、胸やけ、二日酔い、悪酔いによるむかつき・はきけ・嘔吐に。

☆3粒錠…27錠・60錠・150錠 ☆顆粒…16包・40包



北川 春 巢 著

川柳隨筆  
句 集

「聴 診 器」

好評 発売 中  
送料 共 千 円

日逝去。―かかる世に城は昔の美しさ―などの佳句がある。(米沢曉明氏からお知らせをうける)

▽同人の動向△

▼若本多久志氏(西宮市)は三月十一日～十八日までハワイへ。ハワイウイロー社川柳会の故若本あき坊氏の墓参のためである。それと来年2月に川柳塔社主催でハワイ吟行を企画しているで、それらの打ち合わせも兼ねたハワイ行である

▼川村好郎氏(高石市)は生々庵主幹のあとをうけNHK川柳の選をされることになった。

▼尼緑之助氏(出雲市)か

ら―勤め先の社長が市議に初出馬するのでまた忙しくなります。こちらでも日本川柳協会の役員会を開く予定です。

▼橋高薫風氏(豊中市)は本年1月15日豊中市立中央公民館で、川柳塔橋グループで結成第一回例会を開催。新子、冬二、久美子、漢介、タカ子、三窓、作二郎諸氏ほか、本社的气鋭が参加、ユニークな橋グループに大きな期待が寄せられている。なお第一回旬報の表紙は心密橋の「橋」の字。毎号各橋の橋の字が使用されるらしい。

▼藤井明朗氏(島根県)か

ら4月13日(日)に木次町民体育館で観桜川柳大会を開催、今年も水客先生のご出席の予定ですと。

▼西尾榮氏(八尾市)からクラブの友人と2月21日、23日まで信州路にまわした。白皚々の雪景色を満喫しております―三分間停車雪のホームの信濃そば―

▼浜野奇童氏(岡山県)川柳塔二月号の故鉄児氏の二三夫氏の文を読んで、そんなに鉄児さんが悪かったのかと、弓削勢がおどろきました。鉄児さんの足跡をなんらかの形で残してあげたいと考えております。

▼越智一水(今治市)は2月22、23日高松での郷川連の四国ブロック大会に出席。今年から連盟の理事に推され柳魂を燃やしておられる。

▼竹内翁童氏(岡山県)から編集部にたくさんのハガキを拝受、お礼申しあげます。

▼野村太茂津氏(和歌山市)は、川柳わかやまのため大奮闘されているが、同入句集「川柳塔」を他の句

会へ持参して売ってくださいなど、社としても感謝申しあげている。

▼久家代仕男氏(島根県)食糧事務所の組織改変などで多忙とのこと。最近出雲市に近く勤務出来るようになりよるこんでいますと。

▼若柳潮花氏(高槻市)から、2月2日～4日まで、水客、紫香両君と室戸岬へ来ました。雨、雨で弱りました。

▼尼緑之助氏のご長男(在東京)が病状急変で3月

4日上京。すでに昏睡状態で5日朝膀胱ガンで逝去。42歳の働き盛りだった。氏のご心情を思い―合掌。

▽4月の旬会

▼堺・若芽川柳会は十三日六時から―題は「ギャンブル・定食・ストリップ・花びら」会場は八木摩太郎宅。

▼南大阪川柳会は二十日六時から―題は「構図・油断・迷い・フイクション」。会場は松崎町三丁目大萬。

▼川柳東大阪は二十六日六時から―題は「的・切り出す・あいまい・プラス」。会場は東大阪市中央公民館第二集會室2F。

ショッピング・ゾーン

梅田 一番地

楽しいショッピングとくするの  
くらくらつくるの  
いこいをさます  
百貨店



大阪梅田・水端定休

阪神

電(06)345-1201(代)

# 本社 三月句会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

ホームグラウンドへ復帰第一回の句会である。やはり故郷はいいものだ。諸氏の顔もみな明かるい。

某氏ご寄付の一部で購入した新兵器(柳宏子氏談)のマイクで句会の盛り上がりは素晴らしい。これで声の小さい選者の披露もよく聞きとれるというものである。なおご寄付の残額は何か形のあるもので永久にご芳志を記念にしたい旨、ご報告申しあげ感謝の意を表します。

某氏の柳話は、まず昨今流行りのヘンな川柳へ一本釘をさしてから、かつての阪大川柳会の長崎柳秀医師や笠原路生医師の名句を披露された。(某氏は当時の大阪帝国大学医学部の経理課に勤務されていた)

名誉教授の柳秀先生はイタリアで購入されたという大きなカバンをいつも掲げておられたそう。そのカバンがいつもベシヤンコなので、何が入っているのかと聞いたところ、博士はおもむろにカバンを開けてとり出したのが、うすっぺらい「川柳雑誌」が一冊。教授のカバンに柳誌一冊とは、まことに愉快な話である。(この柳話は原稿にしてみなさんにも読んでいただく予定である)

「八時三十分閉会という規約を厳守して、講演前の選者のおしゃべりも時間を制限、予定どおりに三月句会はおわった。(席題を二題にしたのもそのためであった)」  
(進行・西田柳宏子一記録・高杉鬼遊)

席題「横流し」

西村 芳川選

肩書ヘルト外れて着く物資  
横流しの品は倉庫で眠らせる  
金脈がほしくて乗った横流し  
横流し値段は後のことにする  
夢よもう一度は消えた横流し  
包装の仕方が異な横流し  
横流ししての女性とつゆ知らず  
法律の目を抜けて来た横流し  
横流し部下を殺してけりをつけ  
横流し裏街道をカッポする  
そろばんに相談をした横流し  
横流し法スレスレという手腕  
品切れのビラが知って資金繰り  
横流し住民パワークイとめる  
横流し縦に流れる決算書  
黒幕は涼しい顔の横流し  
横流し旅行かばんの底にある  
横流し電話を置いてからの冷え  
横流し名刺をひとつ置いて去ぬ  
主婦連に押しかけられた横流し  
横流し高いねずみを飼うている  
横流ししさを魚心水心  
横流しコンピューターなど使わない  
堂々の車運で横流し  
公用の車運で横流し  
運賃はグリンとはずむ横流し  
倒産を計画してた横流し

鶴声  
夕花  
恒明  
小松園  
滋雀  
儀成  
文秋  
静馬  
千馬  
多志  
太津  
花梢  
夕花  
醉花  
恒明  
岳客  
水客  
水客  
綾女  
鬼遊  
生々庵  
一三夫  
形水  
天笑  
肖雀  
二踊

## 初心者歓迎

短期速成

費用低廉

内容充実

入会 随時

(規則書呈上)

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目

誓得寺内 関西奇術教室

電話大阪〇六〇七二二八

席題「日参」

村田 飄太選

日参へ根負けしそうな法善寺  
日参の効き目世話焼き聞きにく  
根競べでつしやる日参来る時分  
日参へ職安の風冷たすぎ  
日参の折りが口にじむ百度石  
日参をして裏口の道を続け  
嫌われているのに日参まだ続け  
日参の帰りは道をかえて去に  
息子より親が日参で貰った嫁  
日参で釣った恋なども忘れぬ  
日参で口説く根氣に負かされる  
セルスの意地日参のまだつづき  
猛犬も尾を振る程に通い詰め  
ビカアが消えた頃二人は影ひそめ  
日参で借りていたちの道となり  
日参で借りていたちの道となり

好郎  
古方  
素郎  
多志  
君酒  
素郎  
維久  
鬼遊  
牧生  
柳安  
葛城  
義久  
百酒

初孫へ日参出来る。果報者  
土地を売るうわさへ銀行通いずめ  
日参に今朝満願の百度石  
日参で拝んで借りて借り倒し  
日参へ神さんどっち向いてはる  
紐付きへ無駄な日参のくりかえし  
日参までしたあととしてしかれし  
日参でくどきおとしてしけれし  
親のゆるし得るまで日毎通よた仲

兼題「縄」

高杉 鬼遊選

投げ縄の不覚は足元ゆれて居た  
日本一のやしろ日本一のしめ飾  
大学に居ますのんやと縄をない  
縄跳びにはげふ肥満児汗をふき  
フエニックス縄が解かれて春ぞろ  
信じてるからしめ縄も浄く見え  
縄のれん明日疑わぬひとが寄り  
縄飛びの妻の若さが眩しくて  
縄提げて来たのに枝ぶり見当らず  
人間のエゴ丸出しの縄を張り  
よめはんの見えない縄にあやつられ  
縄のれん浮世の憂さを遮断する  
国と国さえも縄張りもめている  
真切りの夜はこけしの縄を解く  
水道に縄まいている気象官  
荒縄で男結びも船場並み  
縄のれんぐり差別のない世界  
投げ縄のかかる処に女弱なる  
人間の裏を知って結納まで払い  
首縄を渡すに結納まで払い  
菰かむりやつぱり縄でしめるも  
一すじの縄にもなつてくれる母  
縄を持つひとが私を喋らせぬ

柳 滋一 舟 丹 舟 丹 信  
素 一 郎 舟 丹 舟 丹 信  
生 度 郎 舟 丹 舟 丹 信  
唐 庸 郎 舟 丹 舟 丹 信  
瓢 太 佑 庵  
宗 義 祥 月 義  
摩 天 郎  
登 美 也  
正 多 郎  
儀 彰 一  
水 儀 客  
滋 笑  
天 笑  
度 笑  
川 狂 子  
離 久 子  
酢 六 子  
千 万 子  
芳 二 三  
与 呂 志  
十 止 庵

自縄自縛欲欲欲よそこに僕  
一条の縄に縫って豆の蔓  
酸郁と咲き荒縄で束にされ  
縄をもつただけで上からものをいう  
縛ることだけより知らぬ縄である  
縄のれんここではAの顔が効き  
苦しさに勝つて縄目もまた使ひ  
縄屑は縄屑と縄は焼き切れず  
紅蓮の焰不動の縄は焼き切れず  
薬師を街で仕入れて縛る農家  
浮気する夫を縛る縄がす  
縄とびの素足に風が絡みつき  
縄を切る世代へ縄をほどく  
縄をなう少年海をまだ知らず  
いたずらな天使が愛の縄つなぐ  
縄ノレン右の肩から首を入れ  
縄張りにお金の鈴がはつて鳴り  
縄梯子奈落の鬼へ届かない

★

出席—与呂志・一三夫・百酒・敏  
・正彰・喜風・重人・水客・滋雀・  
南柳・柳信・たかし・柳志・文秋・  
古方・一舟・静馬・維久子・多久志  
・鶴声・幸生・花梢・柳安子・吸江  
・太茂津・福水・三十四・千乃子  
・肖二・綾女・六電子・儀一・鎮彦・  
勝晴・緑水・一二三・牧人・重成・  
・素郎・葛城・芳川・形水・重成・岳  
・博泉・鬼遊・凡九郎・好郎・栗・岳  
・人・度・清女・頂留子・瓢太・天笑  
・十止庵・雀踊子・川狂子・生々庵  
・つき子・小花・醉園・君子・あいき・  
美幸・夕花・小松園・葉子。  
▼ご投句は句と共に切手百円分を  
ご封入ください。

凡九郎 太茂津 十止庵 一三夫 日満 正彰 古方 百酒 好郎 勝郎 素郎 醉郎 吸郎 喜風 牧人 風人 江郎 郎郎 晴郎 酒方 水彰 満夫

一灘の味を贈る一



清酒キンロ

兼題「追求」

金井 文秋選

鉄橋も渡りけむりも吐いた縄  
暖い縄をキュービットから貰い  
天国へ昇れる縄は切れそうで  
雲かかる峰に明日を考える  
定退の余生に追求の的がない  
無限とも知らず欲望を追い求め  
売り上げの追求に生きている  
はかなきは馬券を追うた紙吹雪  
美味求真こぼれては咲く花に似て  
追求の恋色褪せる打算の醜  
ギャンブルの深追い自滅が待っている  
儲け話をなすりふりもなく追いかける  
追求もせず売上げをなげいて  
追求が来るとは知らずプラン立て  
追求をすればする程金が逃げ  
欲望を追求したら無で返り  
鎮い 清博 牧牧 幸水 滋博 古静 岳岳  
彦き 女泉 人人 生客 雀泉 方馬 人

生きてるから小さな欲も追い求め  
安ければ安いで手抜きして儲け  
文 秋 雀

### 兼題「細工」

戸田

古万選

貝細工郷土のいろに染め上り  
細工した割に見栄えのせぬお顔  
直線の一刀彫りは妥協せず  
金細工は不要と吐芸まともならぬ  
細工手掛けし人の貧しがり  
細工場以外居り場のない男  
小細工を後姿に封じられ  
儀式はじまる前に細工すんでいた  
細工する言葉に自分を見うしな  
始めから尻っぽを出してる子の細工  
背水の陣小細工と縁を切る  
思想のない男の細工光ってる  
年寄がひとりやってる薬細工  
貝細工きれいな嘘を買う旅愁  
旅みやげは哀し越前竹人形  
不細工な日曜大工に妻安心  
安物の欄間の細工はめてはる  
うぬぼれと云う小細工へ生きてはる  
不細工に歩いて可愛いあひるの子  
小細工が出来ますそんなアタがかん  
ちよとした細工でまだまだ役に立ち  
どう細工してもあつさり手を上る  
卵うめる海亀の不細工な手を見る  
ちよとした細工で春の水ぐるま  
小細工をしたばかりにヒスつる  
鮮やかに細工の涙敵の目だ  
泥細工子供の声がこぼれそう  
小細工が過ぎてとうとう花を見ず  
老いの涙細工したとはうけとれず  
小細工の出来ぬ職人ひまがり  
福相な耳をかくしてはる細工

幸太郎 清女 牧人 二二三 鬼遊 十三 水客 渡子 君花 醉々 小松園 夕花 菜郎 博郎 素久子 維久子 凡九郎 頂留子 牧客 水客 素郎 多志 生々 正彰 福水 清女 維久子

## 一分間の柳論

神谷凡九郎

川柳は人間を裸にして、そこから何かを見  
つけようとする宗教で云う経文のような物で  
はないのだろうか。悟りすました人にも悩  
みが、親切そうな人にも裏があるように、人間  
も社会も表も裏もよく見てみなければ本当は  
判らない。自分も作り、他人様も作る川柳を  
通して、その中から物を見る見方を少しでも  
教えてもらおう。『山に入って山を見ず』と  
云う言葉もある、決しておぼれることのない  
ように。

しかし、たとえ物まねから始まろうが結局

細工したなとこまで出かかった  
小細工へおんな生命を転がした  
なに細工したのかひとり笑うてる  
細工した分だけ男嫌われる  
人間ですものちつとは細工するつもり

### 兼題「活動」

川村 好郎選

出る杭は打たれる 覚悟の活動家 一栄  
活動がはじまる 街の気配 平和 一三夫  
よき時代活動写真と云った頃 日満  
自衛隊奮が活動する 平和 一三夫  
活動家はじまる 街の気配 平和 一三夫  
火山活動 日本沈没の前 ぶれか 瓢箪太  
活動もするが悪名もまき散らし 恒明  
活動家自己撞着に悩む夜も 多志  
活動家などいい気の爆破狂 一三夫

は自分をとり間違えないようにしたい。た  
とえそれが独善であつたとしても先ずそれは  
把んでいなければと思う。勿論その後は他人  
様と同意出来る努力はしなければいけないの  
は云うまでもないだろうが。そして川柳は  
『人間陶冶の詩』であり、人間である『こと  
は忘れずに』川柳はもう一つの『詩』である  
と思うようになった。病んだり傷ついたり  
そして挙句の果棄てると云うような事のない  
ように、他人様の忠告御教示を受けながら何  
時々々々までもそして少しでも他人様の共鳴が  
受けられるように。

電話帖お前も活動して千切れ  
活動家と云われ大きな穴を明け  
活動家野もじつとしておら  
活動の音エンジンの港町  
活動の日を夢みてる車椅子  
活動を止めてはならぬコマである  
親のスネかじって活動多忙なり  
春一番天井の鼠も暴れ出し  
持つて死ぬ気かと活動ひやかされ  
大金庫屋の活動を仕舞い込む  
活動を祈る左遷の酒を酌ぎ  
俵家は活動まってる朝の靴  
活動家とも出しゃばりとも言われ  
活動に備えるつもりが二日酔い  
婦人活動止めた足腰痛くなる  
虫穴を出るの草の色が生き  
甲花一對選挙活動の匂い  
電話帖お前も活動して千切れ  
活動家と云われ大きな穴を明け  
活動家野もじつとしておら  
活動の音エンジンの港町  
活動の日を夢みてる車椅子  
活動を止めてはならぬコマである  
親のスネかじって活動多忙なり  
春一番天井の鼠も暴れ出し  
持つて死ぬ気かと活動ひやかされ  
大金庫屋の活動を仕舞い込む  
活動を祈る左遷の酒を酌ぎ  
俵家は活動まってる朝の靴  
活動家とも出しゃばりとも言われ  
活動に備えるつもりが二日酔い  
婦人活動止めた足腰痛くなる  
虫穴を出るの草の色が生き  
甲花一對選挙活動の匂い

(河井庸佑・整理)

## 川柳塔を伸ばす会

▼橋高薫風氏の「橋」グループ。

▼高寛聖鈍氏が世話役で「三井が丘川柳会」が誕生した。薫風氏などが応援して一月五日に三井が丘団地の方々と第一回句会を開催、盛会だった。句報も発行されいよいよ軌道に乗ったようである。(会長は山本草生氏)

▼山本素郎氏(編集部員)は「川柳左海」を結成、すでに数回の句会を開き新人育成に大わらわである。

## 雅号ぶつちやげばなし

(139)

てっしゅ



室 谷 徹 舟

二十五才頃より俳句を本名惣治(そうじ)でやっておりましたが、三十才で復員交通局に奉職してから川柳が面白そうなので俳句から川柳に浮気したのは三十五才。それから北川春巢、児島与呂志先生に師事をうけて浮気なし現在五十六才になりました。少し句が抜けるようになって鉄舟としましたが、姓名学上よくないとのこと(本名も共に)通称名雅号共通で徹舟(てっしゅ)と昭和四十五年に改名して現在に至っております。句の方がもう一つですが師の御恩に報いるよう努力します。

交通局職員 五十六才

## 「川俳混交」考

(50年2月22日付朝日新聞夕刊)

「かき根」ある方がよい」

「最近の柳誌・俳誌から」  
前略「川柳塔」(十二月号・大阪市)にインフレをテーマにした作がある。こういうテーマを直撃出来るのが、川柳の魅力なのだ。

「値上りの不満もつめて市場籠」

「一円が落ちたと教えてくれる人」

井上マサ子  
岩田 三和

てるべく、奮闘中である。  
▼清水一保氏の東伯町川柳会も活躍中。

「値上げ分湯に浸ったらのほせ気味」  
島田 昭治  
「おしゃもじもあっとおどろく値上げ巾」  
梅本登美也  
後略——  
(後藤比奈夫)

## 川柳塔社常任理事会 (3・4)

多久志氏の会計報告後、前月の欠席諸氏にそのあらましを報告。  
某氏のご寄付からその一部でマイク購入、また残額は有効に生かすためいろいろな案が出された。

前評判上々のハワイ吟行は明51年2月中とさき、団長に若本多久志氏、副団長には西尾榮氏、川村好郎氏。(詳細は次号に発表)この海外吟行は本社が主催し、多久志氏は3月11日に故あき坊氏の墓参をかねてハワイへ飛ばれることになった。

本年七月七日の路郎忌の企画もなり、次号に発表のはこびとなった。  
出席—多久志・榮・古方・静馬・水客・文秋・百酒・形水・好郎・いわを・太茂津・薫風・小松園・一三夫諸氏。

## 編集会 議 (3月7日)

会議のだから長いのは禁物。部員の酒友がどこかで待っているだから、ガンガン議題をぶつけていく。  
三月号のあれこれに反省や希望が全員からのべられる。(不二田提出の某氏からの三月号評を中心にして忌憚ない意見が交わされた)

出席—素郎・天笑・岳人・庸佑・酔々・鬼遊—一三夫諸氏。



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

いずも川柳会

板垣

草丘報

美代子

義実

由喜江

緑之助

美絵湖

独仙

郁生

あきら

健太郎

晴月

孤呂二

町紅

文子

軒太

たつみ

明朗

白汀

代仕男

豊作報

三幸堂

梁水

小犬

信じ

合う

終点

までの

手をつ

なぎ

稲田

川柳

たまし

ま

小犬

え

母の

句い

を知

つて

いる

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

終

点

ま

の

手

をつ

なぎ

稲

田

川

柳

た

ま

小

犬

え

母

の

句

い

知

つ

て

い

る

信

じ

合

う

堂と表門から来る詐欺師  
また一つ表看板消す不況  
タミナルの隅で兎を売る男  
生活を賭けた初発の顔なじみ

南海電鉄川柳会(大阪市) 辻

開業ヘテリブックの馴れた人  
開業の花輪そのまま三月たち  
銀行オープン粗品ごときに又つられ  
看板を変えて不況を避けて見る  
二代目の知らぬ開業への苦心  
これからへ過去生かす気の店開ける  
開業の宵はパトロンらしい客  
開業の当座は社長顔を見せ  
開業の資本の顔でなし

川柳たけはら

森井

子と遊ぶ木馬に冬の陽がにぶい  
この道はヤミ米背負って通った道  
日々好日仏壇拝す妻のいて  
夫には済まなく昼のドラマ見る  
最良の年でありたいまきを割る  
子よすまぬ中ぶらりんに病む師走  
この夕焼けが見たくて一人旅にいる  
大の字に寝たきりな夢を見る  
膝の子の寝顔にあきぬ夫婦きり  
転落の詩集に咲いた青い華  
澄み切った秋へ咲く花枯れる花  
お使いのメモひかなで用が足り  
窓たたく音にも心残す秋  
いにしえの彩で大路路陽が落ちる  
しんかんせんあんまり早くない感じ  
京の朝すが静かなたすまい  
自己主義のコロッと寝ればそれでよし  
人かなし上意下達へかきこまり  
笑っても赤い眼だけは隠されず  
元且やきりと妻のうしろ顔

形入弥 入仙 好郎 柳信 綾子 宏一 保儀 凡九 十止 肖二 居水 青居 松緑 静水 房水 千合 不朽 蘭幸 笑晴 紫光 凡女 貞子 愛居 政己 英詩 一のばら

適当に無駄使いして旅たのし

川柳大阪

児島与呂志報

笑うだけ利口な女寄せつけず  
君というライバルが居て今日の僕  
北風にじっと耐える鬼丸  
羽子板の音がうるさい二日酔  
空気が美味いと京に惚れている  
男未だ知らぬ女の肌の艶  
結果論云えても最初五里霧中  
深山の紅葉裾から映え上り  
遠足が走り通しの最後尾  
三カ日酒量のおとろえ知る五十路  
冬将軍大動脈を寸断した七曲り  
ハンドルを汗して過ぎ

それからの血汐がさわぐ処女の詩  
肝心なところで三味の糸が切れ  
初春へ羽子板持つてボースする  
処女だろとなかろと死ぬ程ほれまい  
花を剪る仕草が処女を匂わせる  
出発の歩むを決める自尊心  
希望の灯点して友情の目信  
愛情に溺れて見たい火をつける  
貴祿の名刺の一行よく効いた  
貴祿を崩してならぬ猪口をふせ  
沈没をせぬ笹舟にある自信  
きっちり沈没先を妻は知り  
善処という答弁とどけられ  
とほけても顔に本心出している  
知りぬいてとどけ合っている老夫婦  
故郷で母は家風を守っている  
漬物に家風ができて歳となり  
長男は家風を理屈でつきやぶり  
押し流される家風へじっと目をむり

川柳後案

井上柳五郎報

陽子 樂遊 照路 勝志 柳五郎 鮫虎 秋月 胡風 清路 宗義 博友 与呂志 胡蝶 雅子 道風 笑人 重醉 洛松 德贊 雅巢 徹舟 喜峰 秀介 六竜 京介 誓人 本蔭 敏樺 志報 文明

沈没の沼執念の泡が立ち

川柳ささやま

河原みのる報

スタミナも尽き果てつかんパイを投げ  
スタミナの切れがじんわり判りだし  
五十坂かねとスタミナ忙がしい  
耳持たれ兎宿命とあきらめる  
泣き兎も嘔吐かないとは本音  
いじらしい実験台にのるうさぎ  
兎の目になって云いたいことが言え  
故郷に嫁家の愚痴を捨てて行く  
ふさふさが追っかけてくる寺の寄附  
変らないベンチふるさとの駅が待ち  
ABC習い始めたにぎやかさ  
ABCも知らず農協空の旅  
ABC習ってからの口答え  
まだ生きている望み医者かえ葉替え  
安楽死だけが望みの老いを生さ  
途方もない孫ののぞみをけなされず  
菜の花句会

青春を二階に閉じて二浪する 高杉 鬼遊報 夕花

佳句地10選

(前月号から)

八木 摩天 郎選

日本髪不況をしばし忘れさせ  
老いてなお異性は異性としての距離  
落選のインタビュにもまだ野心  
善人の怒りは石を握るだけ  
和を願う別れの嘘が美しい  
貧しさに触れずに困む丸い膳  
食堂の窓へ焼芋屋の匂い  
旅ひとりに男に酒の味がある  
末席でさくら拍手の頃を待ち  
当然のようにノーベル賞を受け  
春 鬼焼 小松園 一舟 果

蒸気のはが住んでた中二階  
漫才屋の手帳に漫才書いている  
印一つ探しあぐねた妻の留守  
鉛筆がすぐ丸くなる投票所  
別室の二階は海の見える部屋  
ひっそりと二階の女ものを縫う  
答案の出来が鉛筆軽くなる  
寒の入駅の時スターは春春春  
鉄砲と言われ時時たる味  
ぐい飲みに寒きわまり黒なまこ  
予想屋の赤鉛筆に又迷い  
探さんでもアうならんばでもおます  
値切られて手帳見い見い辛ろおます  
胸算で飲むふところの寒さなり  
鉛筆も家庭教師が削らされ  
ふく誘う女で妻にない若さ  
絵心をそられてる寒牡丹  
魚屋の手帳はうろこついたまま  
4Bの動きに画像生きて来る

# 南大阪川柳会

金井

文秋報

貸し借りも簡抜け露路の人間味  
金と地位なかつた頃の人間味  
だめ押され記憶怪しくなってくる  
憎まれる記憶ばかりを老いて抱く  
フォード来日暗い記憶がふとよぎり  
亡き人との愛の記憶をたぐりよせ  
記憶力もうおふくろを喰えない  
記憶をたどる母童心にもどりそう  
営業十年記憶を迎る事故の数  
駆け寄った握手に記憶温くぬられ  
日常の隋性の中にあるリズムム  
ハハーン読みはったナと思つ話する  
琴線に触れる言葉にかくす棘  
山男喋らぬ日常でも豊か  
停年のかげりに触れている西陽

醉々 幸々 美幸 綾女 肖二 喜美代 喜風人 水京 岳郎 素郎 柳宏子 凡九郎 頂留子 牧一 儀一 恒明 維久子 正彰 滋雀 千万子 文秋 十止庵 好郎 智彦 鎮彦 季雅 章雅 柳宏子 凡九郎 綾女 岳踊子 雀踊子

子の愛に触れて心に虹を抱く  
本心に触れぬ見合のじれったい  
生かじりこから先へ息がきれ  
玉ねぎを切つても涙出ぬ女  
ときめきを訴える目が涙ぐみ

# 城北朗句会

川口

内孫のおとなしさ誇張して話し  
おいといひの歩印と一生が終りそう  
振袖で女の夢中と云うとどし  
おく手とオールドミスとの弁  
お抜けがすんで衝突事故にあい  
いつからかオヤジと云うて見こされ  
おべつかかと思つて心くすぐられ  
おこる事あほらしい年と成り  
おめでたいおめでたいとは飲める人  
オイルナイト、イエスの知らぬ処で酔い  
御歳暮の鮭にもあつた帰来性  
説得にひと言多い逆効果  
孫々で名前をとるお正月  
寒椿散つても炎える彩を持ち  
初日の出拝む手父母の空にむけ  
逢う時が別れと思うほどに老い  
初春や足にまかせて初詣り  
いっぺんだけなのに女将から賀状

# 京都塔の会

松川

一の字の墨のかすれに出る宿命  
学歴の前途は歩きよいレール  
黒幕をこっそり訪うた記者の感  
塔一つ眺めて清水坂が好き  
なにもかもあの日のままの母校訪う  
バス一台おくらし初恋意識をし  
前途ある青年卒を海に投げ  
久々に訪えば忌中で口ごもり  
加茂の杭すぐきのヘタがひつかり  
訪う程に事の運びを変えられる

静香 好風 肖二 克美 春巢 繁酒 喜代子 静歩 智生 三十四 柳信 右近庵 ますえ 喜洗 生仏 満津村 秀三十四 英断 求芽 和王 明代 白溪子 直笛 誠史 季贊

# 第八回東洋樹川柳賞贈呈

# 川柳大会

第八回東洋樹川柳賞は「川柳の町」づくりに献身された岡山県の「弓削川柳社」に決定。

◇日時 五月十一日(日) 十二時

◇会場 明治生命ビル大ホール(神戸市 葺合区磯上通八一九一六―国鉄 三宮駅下車)

# ◇兼題

「箸」 片山 巷雨選  
「挑む」 中尾 藻介選  
「街路樹」 磯野いさむ選  
「帰る」 西沢 青二選  
「二人」 西尾 葵選  
「大地」 三条東洋樹選

各題二句・欠席投句受付けず。

◇記念講演「海は一つ」 丸山弓削平

会費 五百円 (知事賞ほか)

主催 時の川柳社

新婚で来た湯の街を訪う夫婦  
重詰へ別にすぐきの櫓を添え  
ふぐ提灯ついても暗い道であら  
一言居士そんな姑でつがなし

### 和歌山短詩型文学クラブ

中筋三幸報

飛鳥

金持ちの犬まで人を寄せつけず  
大金を持って姿勢がゆがんでる

金持ちの家水仙の花萎んでる

そのあとは対立のまま雪となる

盃をふせて本論切り出され

盃を義理人情の盾にとり

唇に盃が鳴る嬉しい日

口紅のついた盃高うつき

金持ちに聞けば血圧高いとか

赤い爪差出す猫口の下心

ケラケラと笑ひ祝盃受けている

狂わしき女体のように雪が舞い

雪の中ボルノ看板炎えている

もったいない労作品の雪祭り

雪よ降れ己が理性の戻るまで

ハワイ川柳ウイロー社 林

乗りまわす新車内輪は火の車

蒼蛇樓報

三平知品其凡勇凡政富

幸雄也子夕夫次峰子

雄 幸 也 子 夕 夫 次 峰 子

## 各地柳壇賞決定

若本多久志選

49年四月号から50年3月号までの「佳句地  
10選」にえらばれた百二十句を無記名で清記  
したものを若本多久志副理事長に提出して敵  
選。ここに榮えある一句が50年度の各地柳壇  
賞となりました。

ガラス切る一直線の音さやか

飛鳥 蘇水 杜智 武光 和光 佐知 富夫 凡次 勇峰 其子 品夕 知也 三幸 平雄 柳園 蒼蛇樓報

あと五日すれば新年孫が来る  
新しい知事を迎えて年が明け  
新婚をことほぐ祝辞の長いこと  
年ごとに新春御慶ぐわえし  
眉ほどの新月に椰子たわむれて  
新社員今日も小さい顔で来る  
新しい鍵を日系の知事握り  
新婚の明治なつつかし高島田  
新顔の弱き古顔へついで行き  
祝福に涙あふれる新人賞  
新世帯当分月賦と縁されず  
新任の教師生徒に試される  
新年へ希望大きく頑張りう  
にここに校門くぐる新人生  
忘れた植木の新芽今朝の幸  
新居では家内の古きより目立ち  
新生の隣をかねに初詣で  
毎朝を新たに迎え掌を合わす  
駒つなぎ句会(大阪府) 岸  
おみそ汁やべり母さん日本一  
形良い松に伝説こじつくる  
初寄席の目出度く納め松ずくし

三石 翠峰 快夢 万里 峯起 河舟 雪女 山影 風舟 北民 細蛇 公雪 小吉 卡吉 草海 柳郎 南柳 昌美 紫津 多緒

菜の花句会  
句と雅号を刻し、作者へ川柳塔本社から記  
念品を贈呈しました。

土井 鹿蔵

① ガラス切る一直線の音さやか  
② レールまだ続く終着駅がない  
③ 女の子が泣いて卒業式らしく  
④ 菜の花のなかへ遍路の鈴が消え  
⑤ 燃えつきていない証拠は風を待ち  
⑥ やわらかい声で背から斬ってくる  
⑦ 馬耳東風寡婦一直線に行く

鹿蔵 可一 鹿蔵 水松 澄客 好郎

## 川柳塔柳箋

一冊 百円  
送料 七十円

⑧ 境内を横切るだけの市場籠  
⑨ 一本のケモノ鉄網の外にいた  
⑩ 虹は浮気者七つも色があり  
他人の夢ばかり落ちていた酒場  
竹べらで掘った歴史の嘘あばく  
女とは溢れる涙も運命  
しずまらぬ心へ振子の音ばかり  
一矢報いてしこりが一つふえ  
不仲とも知らず蔓は垣根越す  
鉄の火と芒の炎男と女

好吸 美子 歌子 十子 富子 政子 綾子 薫子 江子 江子 風子

レイオフで松の手入れは出来たけど  
つじつまの合ぬ同士が打ちとけて  
つじつまの合ぬ電話を妻が受け  
つじつまが合うても税金安ならず  
思案する娘のおくれ毛が美しく  
おくれ毛が男まさりをつれをいだせ  
おくれ毛が世帯やつれを感じだせ  
おくれ毛をあくびと一緒にかきあげる  
おくれ毛に合わせたアイロン使いわけ  
質悪いおくれ毛ビンの世話になり  
おくれ毛を直すとは母は美しい  
おくれ毛の先から老いがしのびより  
おくれ毛を上げる手つきは松にもなる  
おくれ毛を上げる美人は松にもなる  
アップしてからおくれ毛の良さを知り  
おくれ毛に女のたくらみゆれている  
おくれ毛がすすり泣いてる夢二の絵  
人形も世帯つかれのおくれ毛か

恒子 茂子 規子 柳子 石子 警子 鎮子 恭子 太子 彦子 信子 美子 眉子 小松園

# 募集

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

「環 境」 斎藤 三十四 選  
「傘」 山川 阿茶 選  
「目 減り」 弘津 柳慶 選

川柳塔 (10句) 西 尾 栞 選  
水煙抄 (10句) 菊沢 小松園 選  
課題吟 (各題5句以内)

六月号発表 (4月15日締切)

★川柳塔欄の投句は本社同人に限り、用紙はなるべく柳葉をご使用ください。

「夏祭り」 福浦 勝晴 選  
「少年」 奥谷 弘朗 選  
「うなぎ」 小西 無鬼 選

川柳塔 (10句) 西 尾 栞 選  
水煙抄 (10句) 菊沢 小松園 選  
課題吟 (各題5句以内)

七月号発表 (5月15日締切)

「愛染帖」も毎月15日締切

発行所

川柳塔社

郵便番号

542

印刷所 藤原 童心 社

編集人 中島 蓬太 郎

大阪市南区巖谷中之町二〇番地

昭和五十年三月二十五日印刷  
昭和五十年四月一日発行

定価 三百円 (送料十六円)  
半年分 千八百五十円 (送料共)  
一年分 三千六百元 (送料共)

## 本社四月句会

日時 四月七日 (月) 午後六時  
会場 以和貴荘 (いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目  
電話 622・1275 番

兼題 柳 話

席題 二題 当日発表  
会費 三百円

「塗 る」 菊 沢 小松園 選  
「蹴 る」 西 田 牧人 選  
「息 子」 八 木 柳宏子 選  
「城」 若 本 摩天郎 選

各題三句以内厳守  
★今月の出題・高杉忠選

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区巖谷中之町20

川 柳 塔 社

5月の兼題

昔 空き缶

「さしがね 峠」

以和貴荘へ帰りました

大阪・神戸・京都・宝塚を  
最も便利に結ぶ

# 阪急電車



# ・ペンペン草・

雑誌選者交代

★例年のとおり四月号から雑誌選者が交代。水煙抄は菊沢小松園氏。それに新風「愛染帖」は橋高薫風氏である。

秀句鑑賞へ新人群

★本号から水煙抄の秀句鑑賞へ新鋭作家が執筆する。まず香川酔々氏がトップバッターとして出場。こんごは地方の古豪、新鋭にもご登場ねがい「秀句鑑賞」にも清新さをひろげていく。

12の頭腦

★編集部員はサラリー

▼葉子コーナー

▼待望の春です。やっとな蘇生の思いがなれます。寒さにはなれてはいるはずの道産子も冬は骨身にこたえる辛らさに泣かされどうしてでした。暑がり屋さんの不二田様は真冬も平気、それは毎日体重のふえるのを苦にして減食しておられるのが羨やましいやら腹立たしいやら。ゴメンなさい。

マン4名、学校の先生が3名、経営者が3名に編集者が1名、自由業が1名という多彩な顔ぶれである。川柳塔社同人による川柳塔社の機関誌づくりはぼくの信条だったが、みなさんの声をそのまま誌上におつづけて、よりよい雑誌づくり、手をとって進んでいきたい。おかげ様で、「俳風柳多留二十五篇」「麻生路郎物語」「百人一首と川柳」は好評である。ここへさらに一本、柱を建てるべく部員は懸命なのだ。みなさんの後押し、よろしく願います。

ジャンジャン町

★毎月、編集がおわって印刷所へ原稿を送りこむのが十すぎ、そして校了になるのが二十すぎである。その編集と校正がひときりつくと、まず頭の洗たくに新世界へ足を向ける。社の帰りに地下鉄動物園前で葉子さんと別れ、目指すはポルノ洋画劇場だ。いつも無料入場券を使っているので入場料はいく

らだか知らないが、戦前はこれ劇場は顔パスの利いたとこで、当時は若いやつや二人は連れて入りびた。小入屋だった。(実はぼくの雑文はこの劇場でネタを仕入れていたのである)

串カツ屋

★この劇場を出ると、「でんぐ」という串カツへ直行。これが月二回のバターンとなつていく。酒がダメなのでコココーラ一本とクシキマリである。このジャンジャン町の串カツ屋へ、かつて霞乃先生が一度連れて行って、れとおしゃつたが、路郎先生がおゆるしにならなかつた。それも道理、ここは悪名高い愛隣地区の一角なのである。王将の坂田三吉や直木賞の黒岩重吾氏がこの町を愛したという下にも大好きの松葉杖の老乞食など世にあらば箸片手にこれ掃れグンとていて町よきりな町づくりにも協力しているのだ。(不二田一三夫)

姉妹品大和錦印



# 柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社  
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1  
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁  
全国府県警察  
大阪府警察本部  
講道館・御指定

昭和五十四年三月二十五日  
第三種郵便物認可  
発行毎月一日発行

川柳塔

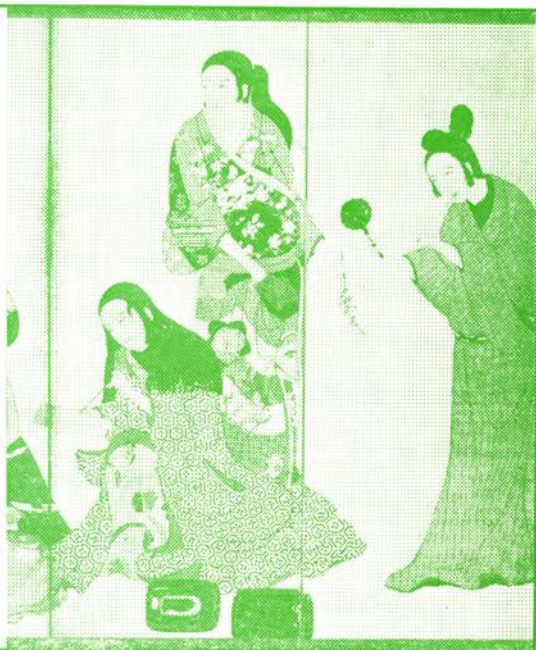
四月号

# 美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の  
静かな環境にある大和文華館  
は 日本建築の特色に近代美  
を生かした美術の殿堂です  
収蔵品も日本・中国を中心に  
国宝・重要文化財を含む 有  
数のコレクションです  
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

**近鉄**



一番よい酒

うまい酒

清酒

**菊正宗**

宮内庁御用達  
菊正宗酒造株式会社  
神戸・灘・御影

定価 三百円 (送料十六円)